

華實年浪草

春之部
卷之一

中村俊定文庫
文庫 18
591
1





丰浪草三餘抄回向文



謹而この書小記一奉る取の神社佛閣乃
法界信仏よりしてまゝはく我今此書冊を
著いせや之れ毎いさゝ童子の戯と指爪甲以
もて佛像と画紙かまの工お乃た却ら狂言綺
語乃娯戯なりしる暹障と南中これ似る繪と
いへとも凡昔書小紙紙をそとるを春秋廿とせ



阿耨多羅三藐三菩提の如く寝食の如く
そく自己の迷妄の如く如く
けりて其の如く
て亦元来跛躄の如く
微功の如く
法界の如く
ひかりの如く

安穩先考先妣の如く法界の貴賤靈等并此
書たつた如く
如く悉皆成佛の如く
師友一葉の如く
かきし如く
義の如く
金言の如く

詠佛乘の極かゝ古の高僧乃得句先
献佛と乃多るまはあふまの多門敬白

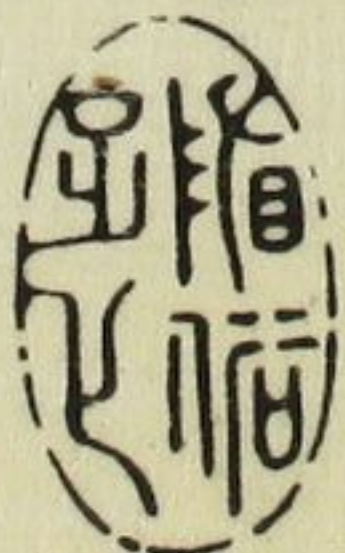
干時

天明元年丑臘月

三餘齋鹿文謹書



華實年浪草三餘抄自序



夫雪月花の四季第一の景物とて花乃
餘波なりて此草木鳥獸小及海り神祭佛事
公支格式をその趣いおのりて日とて月に
かち月をて四季ふくむるはは月花とて
節物からぬ入ぬをれと詩歌といひ連誹といふ
つまじくはれとて別な構ふは良材わ

汗ひの中も俳諧を和歌連哥の如く書
 してあつと其視信語怪話と骨と風流
 雅俗肉也と上を雲わ乃るゆゑに
 下は穢物等の業と云ふ森羅万象
 みか遠向くねま句也利柄おぢく雲池小
 すじ懐らいつと文多と刷起と扇の鳥ニシ鷓サイ
 酒樽と解ふヒツク響子にヒツクおとつとヒツク此は

何と云ふか、その考證の如く、その
 夏と、雨風、流石と、その如く、
 わる故、その世に、先帝、その書、
 と、その如く、その如く、その如く、
 省、その如く、その如く、その如く、
 と、その如く、その如く、その如く、
 る、その如く、その如く、その如く、

考一月の終りにあつた年終終りの記して一月
 十二月、うち終りのうち上下を所とのわつた
 として十五卷俳諧三餘抄と名づくえり
 終り續けり紙汲よきく物江平美と題され
 一紙一愚乃思ひのり根さう誤りの後り
 又ある處はゆきつと何から人よなき言ひなき
 わつと唯懐中の記書なりと云ふと云うに

私塾一書免てくるふ記さう所よりわつた
 万破の窓屋の板庇より月影のと免かして
 一書守得る人つわりつむ一日書林の未第
 屋をたがせてせられたる心と紙ゆむ書上の布
 きけらる福舟のいかにもむすたひいさう
 ころがら中りいさうぬ書林と和漢の事實歳
 時の風俗を何う能く乃料のあつた凡情

物を志と人きりてあるや人の物をいんやされ
る常れ人のる又能得乃用ともなうて此物
華實年浪草とむしと梓小縷いんもふ予
かしく周人の腐鼠とふちて璞と楚客の
山雞を何をゆりて鳳凰とふりて留識者の
こつて免きす今海にふるを記あさる
書紙様あり乃せと世ははつん人の愛いと

拓くのまらねるこしむしむらぶ辞まといしむら
まけはまらぬらにぬかかとい福うらぬ後の人
そのまらぬらにぬかかとい福うらぬ後の人
此よりまらぬらにぬかかとい福うらぬ後の人

于時

天明元辛丑のこ月 油幕菴木雁子鹿文題



俳諧三餘抄序

青巖

心不可不較系曲禮三子羞
皆原于此君子無故琴
瑟不離身降此而造吹
等鼓瑟彈絃較手汎闋大

走鷄六博蹋鞠何所不有
唯至優游言詠置懷風
月幽閑之趣何啻霄壤
鷄君在

王
府高爵為朝散大夫不為
非仕優而無他嗜好獨喜
為諧語之國風之數變
者如詩之有伊風子欵
其著者是編博列旁搜無
復所遺有助於斯技也

大笑因乞余題言余素
 不習之焉能贊一辭唯
 言相識之久知其所以繫
 心以為之序待之若吾戲
 謔之不為虐

鷄君有馬

安永辛丑春三月

金峨井純卿撰



天明二年壬寅仲春

東江源鮮書

東江
居士

年浪子序

あゝと御社に徳を以て上玉ふ入
行更に祭下田家の二年かきとて高
修年及一宿をさるる世なるは
たよりと申すもあはれなるは一語も
しゝとあはれ守るは其向をたよるは
四時草木も然る品々世々の古きは

選りしる季後らふらぬ様も
牛子行らふらぬらぬらぬ
をのらぬらぬらぬらぬらぬ
大金あらぬらぬらぬらぬ

舟入道生の島宮体一も朝教大夫
稻川く一三餘并兼文子官禰入
いふらぬらぬらぬらぬらぬ

避其の志のらぬらぬらぬ
そく申あらぬらぬらぬらぬ
臨出入ぬらぬらぬらぬらぬ
まらぬらぬらぬらぬらぬらぬ
根其ふらぬらぬらぬらぬらぬ
安あぬらぬらぬらぬらぬらぬ
廿一年のらぬらぬらぬらぬらぬ

縁より中より母子全親十二位号と
 年浪三餘抄と云ふ事世に云ふ
 兼つとと重なる久し一は然る事有る
 此と云ふ事一は是を需む事と云ふ事
 短方より言ひ給ふ情弊の緒を解ふと
 拾得書年譜を減法に事少く
 志ふべしと云ふ時より一は既り拙を
 忘れ亦る事と採之申す中々其
 所年譜に

空林居士

蓼太



華英年譜

三

華實年浪草三餘抄卷之一上目錄

○春太皞勾芒蒼天東君青陽韶光正月

陸月一丁○王春月太簇二丁○立春雨水孟春

陔月夏正太皞月初空月霞初月初春月早綠月

年端月三丁○暮新月元日元朝三朝元三三始

三元履端四方拜星佛四丁○齒固餅鏡五丁

○供御藥藥子屠蘇白散度嶂散六丁○椒柏

酒椒酒椒觴朝賀朝拜奏賀奏瑞小朝拜

七丁○元日節會諸司奏七曜御曆冰槎國酒奏

國括笛 腹赤奏 八丁 ○院拜禮 祇園削掛 十二丁 ○

歲德神 元方棚 毘沙門功德經 若夷 夷廻 大

黑舞 十二丁 ○春駒鳥追 十三丁 ○傀儡師 猿曳

門神棚 門松立松 飾松 飾竹 十四丁 ○飾繩

飾藁 注連飾 十五丁 ○飾炭 飾海老 橙掛 麩

十六丁 ○若餅 雜煮祝 くと祝 十八丁 ○いしけかこ

結毘布 大根 用牛蒡 用豆 大箸 蓬萊飾 喰積

十九丁 ○穗俵 榎 あのもれ 搗栗 串柳 柚栞

二十丁 ○栞子 橘 樺 齒采 穗長 裏白 廿一丁 ○毘

布 葩煎 熨斗 野老 梅干 廿二丁 ○俵子

田作 小殿原 押鮎 海羸身 螺肴 數子 廿三丁

○葩煎賣 羊男 庭竈 福藁鋪 福藁 廿四丁

○福沸 福鍋 毬打 づま 廿五丁 ○羽子板 胡

鬼板 ぐねつく 廿六丁 ○破魔弓 破魔矢 年玉

廿七丁 ○宝引 福引 弓始 廿八丁 ○馬乘初 蔵用

廿九丁 ○湯殿始 飛馬始 着衣始 三十丁 ○船乘初

舟玉祭 三十一丁 ○幸木 幸籠 藁盒子 三物連歌

同誹諧 裏白連歌 同俳諧 三十二丁 ○御慶 去年

今年 君々春 千代春 物々々 新年 新玉年

恙ききき 〇いの〇 初雞 三十三丁 〇初夢 初曆

曆用 三十四丁 〇試筆 試毫 吉書 書初 彈初

三十五丁 〇吹初 三十六丁 〇舞初 松囃 謡初 三十

七丁 〇初商 初賣 買初 店卸 帳閉 帳書 三十八

丁 〇歳旦用 節振舞 朝節 夕節 節小袖 松内

注連内 春かガ 三十九丁 〇初芝居 千寿万歳 萬歳 四

十丁 〇御降 寝積 寐舉 水祝 早丁 〇懸想 支賣

桃符 桃板 桃梗 仙木 神茶 鬱壘 畫雞 帖戸

尊索 如願 段灰 飛 春盤 生菜 四十二丁 〇採燕

戴春燕 初子日 子日遊 小松引 子日松 初子日

の玉帚 四十三丁 〇初寅 四十四丁 〇番卸 初卯 卯杖

四十五丁 〇二宮大郷食 朝覲行幸 四十六丁 〇臨時客 〇

包く 四十七丁 〇履新之慶 叙位 天狗宴 早八丁 〇人日

靈辰 七日正月 人々帳ニ貼 初若菜 若菜 七種 歳厨

四十九丁 〇蕙菜摘 薺蒿摘 磯菜摘 五十二丁 〇白

馬節會 五十三丁 〇菜摘川神事 箕面富 五十四丁

〇御齋會 五十五丁 〇真言院御修法 宿直人

義曰正長也此年之長月故稱正月長八頭、意一年ノ頭月也○琅邪代醉編、叙氏智度論云天帝親以宝鏡照四大州、每月一移察人善惡、此三月所謂正南瞻部州、唐人以此不行死刑、本朝仁明天皇、和三年五月詔アリテ、每年三長月於東寺灌頂院三七ノ比丘ヲ撰ヒ法ヲ修シ、國家ヲ鎮護ナサシメ玉フ

王春月

左傳曰春王正月、周正月也○律曆

志曰春王月、每月書王元之三統也、三統

太簇

律○月令曰正月律

合、一光○董仲舒傳曰春秋謂春謂王中、太簇高誘曰簇、一也言陰衰陽發萬物簇地而生○蔡邕月令章句曰律者率也、声之管也、上古聖人本陰陽別風声審清濁而不可以文載、口傳也、于是始鑄作鐘、以主十二月之鐘、難分別、乃截竹為管、謂之律、一者清濁之率法也、声之清濁以律長短為制

已下准之○淮南子曰一律而生五音十二律、而為六十

立春

音、因而六之六六三十六、故三百六十音、以當一歲之日

節○月令廣義、周天玉衡六向曰大寒後十五日斗柄指艮為立春、正月節立始、建也、春无始至、故為之立也○滑稽雜談云正月朔日ヨリ前ニ立春アルヲ年内立春又ハ除日立春ナト云當年之立春去年アリテ來春ノ立春又正月ニアルノ時ハ中一年立春ナシ是ヲ倍ニ空穗年ト云或說一其年ノ矢ヲ中ニ貯フ故、鞠年ト云說侍ル覺束ナシ猶識者ニヨリテ決スヘシ云

雨水

中○月令廣義曰立春後十五日斗柄指寅為雨水、正月中雨水中氣雪散為水也

孟春

元帝纂要

曰正月為孟春○周書曰凡四時成歲者、春、夏、秋、冬、各有孟仲季、以名十二月也

陬月

曆確類書曰正月為陬寅

位之月故曰孟陬亦曰孟陽離騷披提負于孟陬注

太歲在寅曰攝提格正月為陬孟陬者孟春正月也

廣義曰大禹以金德王都安邑國號夏

仍有虞以建寅之月為歲首故謂夏正

初空月 截玉けりて山嵐しつゝあつた

たして一とせのからあつたを初とるなり

截玉けりて山嵐しつゝあつた

幼名月 後鳥羽院

初春月 截玉あつた初春月の初日けり

家隆 早緑月 秘截 躬恒撰

明 年端月 莫傳抄 初春月の初日けり

あつたを初とるなり

暮新月 莫傳抄 初春月の初日けり

元日 玉燭宝典曰正月一日為元日

也始也乾元天德之大始故萬物資乾以始而有氣資坤以生而有形

元朝三朝 尚書大傳 曰正月一

日為歲之朝月之朝 元三 師古漢書注曰元三亦三朝同義也

三始 元日歲之始月之始日之始

三元 玉燭宝典曰元日

者歲之元時之元

荆楚歲時記曰九日食膠牙餠取膠固之義餅制鏡形又○張天
如對類大全曰餅字下麥米粉做成狀如鏡入於爐內烘熟蓋始于
戰國云唐土進膠牙餠ト云膠牙ハ膠字ニカハハ又カクム凡
訓ス牙キバ也餠アメ也餠ヲ食シテ牙ヲ固ルノ意本朝齒固
相似タリ○本朝食鑑云本邦自古以餅為神明之供而作大田
塊以擬鏡形故呼餅稱鏡此擬ハ咫鏡字正月朔日必以鏡餅供
于諸神及一家長幼團樂同薦鏡餅以賀新歲凡用鏡餅祝賀儀
以二箇相重號一重此諱奇用偶者于○棠花物紀云一ハコト云ハ
まらるゝ瓜をゆつせむかカクキ六かよヒキラス工一其重ニモ千井大根
桶ヲモルシを江の大キリ係と申るをよけ風の後山の終とがムルナリ
後者亦こゝろのたき物と申るなり

我々の世々からなるのたき物と申るなり

河海抄曰齒固ノ具ニ大根ヲ用ル事アリ其故ニヤ一名ヲカ
ガミ草ト云○岷江入楚齒固具一本 煮塩 齧點 押點
皆上置點串是 一本 鯉 烏 麻 猪 皆隨盛物串是置上俱
貫之 一本 瓜 漬 茄 漬 蕪 大根 一本 屠蘇 白散
窪杯 空盞 一本 酒盞 窪杯四口 一本 鏡 相具點
大根橋 齒固ハハハカクストク馬ヲ齒ヲ以テ齡ヲ知其理お叶いの凡
供御藥 藥子 屠蘇 白散 度嶂散
江次第曰 供御藥
弘仁年 元日平旦天皇御東廂着御生氣方御直衣具引苑陪膳女房以下著座藥
子入自鬼間候尚藥南座采女二人御藥女官頭一人女官二人候於右青
環門内御厨子所供御臺二本得選於鬼間御陳子付女藏人女
藏人執之來授陪膳内膳自右青環門供齒固具次供一獻屠蘇

洗煖御酒主殿寮設火炉以御藥入於酒名之屠蘇盛別器宮內輔典藥頭

侍醫等三人一一進膳突掌之依位階皆用別杯次供御酒盞次

供御料酒此間內膳官人以大土杯三枚小土器三枚與藥女官

女官前分令掌藥子本方自小兒起次盛御酒盞自御几帳綻舟於藥頭藥

頭傳陪膳主上入自夜御殿面戶當塗篋東方戶立給陪膳女房

取御酒盞入御酒通自東廂御障子參御前供之次召後取次女官

移入御酒盞餘分御鉚子餘分等於大土器傳給於後取人飲畢

次供二獻神明白散也次供銀匙居馬頭盤入神明白散於金銅小器居

中盤尚藥鈿藥入御酒盞次供御畢後女官以匙三度入白散於

大土器次飲分給後取次供三獻度嶂散其儀與二獻同記略○公

事根源曰五十二代嵯峨天皇弘仁年小りりり一人乞とり

功格ゆきのりのりのりのりのり○紀事云古屠蘇之屠忌死尸之

尸加一点作尸是本朝之故實也藥子江次第奉仰之人求童女

未嫁之者屠蘇酒廣韻元日飲之可除瘟氣屠者屠絕鬼氣獲者

獲醒人魂倍說屠蘇草菴之名昔有人居草菴中每歲除夜遺回

里菜一劑令井中浸之至元日取水置於樽合家飲之不病瘟疫

孫思邈有屠蘇酒方蓋取菴名以名酒後人遂以屠蘇為酒名矣

○時鏡新書曰元日飲屠蘇酒先從小者起或有問董勳者答曰

倍以小者得歲故賀之○江次第曰御酒訓三寸者飲酒則邪氣

去皮膚三寸云○款名云酒菴楚歲

椒柏酒 椒酒 椒觴時記曰

元日進椒柏酒椒是玉衡星精也服之令人身輕能走柏是仙藥

○崔寔四民月令曰正月之旦潔祀祖禰進酒降神畢子孫各上

酒記略

敬上るる故私あつた似たりとるを流のりるに下りし
元正の日記と係しるるは流のりる日十九日又元の如く
のれ
元日節會 諸司奏 七曜御曆 氷掇 國栖奏

國栖笛 腹赤奏

日本紀曰持統天皇四年正月戊寅朔庚辰
宴公卿内裏甲申宴公卿内裏仍賜衣

裳○續日本紀曰光仁天皇家龜四年正月丁丑朔宴五位已上
於内裏賜被○潛摺雜談云此節會ハ天子紫宸殿ニ渡御ナ
リテ群臣百官ニ酒ヲ給テ宴會有儀也宴会上書テトヨノア
カリトヨメリ 仁德天皇紀ニ宴會
中辰日 大カタノ節會ノ名ニテ侍ルニ
ヤ豊明節會 土月
中辰日 二ハ限ヘカラス神武天皇ノ御宇ニモ群臣ヲ
ツトヘテ酒ヲ給シ事日本紀ニ見エタリ是ナトヲモ事ノ起

トハ申ヘキ欽云其式江次第二詳ナリ元日宴ト云題ニテト
ヨノアカリト讀ノル○むつきを川流の常存なりし乃そのの
のりるん 頭昭 此人ハ頭輔卿ノ猶子其頃ノ才者博覧也
宴會ヲ豊ノ明トヨノル證哥ナルヘシ豊ノ明ト云詞五節ニ限
ルニ由雜談抄イヘリ○諸司奏者○江次第曰可付内侍所
由件 外任
奏 次被 付藏
人 奏中務省御曆奏宮内省氷掇奏腹赤奏 若違期奏
七日奏之
若當卯日卯杖奏等也奉仰仰外記往年王卿就外弁後被御下
者外記傳仰外弁外記申外弁上卿 中古以来
無此儀 ○七曜御曆者○日
本紀曰推古天皇十二年甲子正月戊午朔始用曆云去戊年之
百濟勅採用曆等書未○延喜式中務省式曰其後官人率陰陽
寮入自建春門進七曜御曆云○公事根源曰七曜の行務は
日月火水木金土の七曜と云ふもの乃乃曆云○氷掇者○

日本紀曰仁德天皇六十二年是歲額田大中疾皇子獵于園雞野時皇子自山上瞻野中有物其形如廬乃遣使者令視還來之日窟也因喚園雞指置大山主問之曰有其野中者何窟矣答之曰冰室也皇子曰其窟如何亦奚用焉曰掘土丈餘以草蓋其上敷敷茅荻取水以置其上既經夏月而不泮其由之當熱月漬水酒以用也皇子則將來其水獻于御門仁德天皇飲之自是以後每當季冬藏冰至春分始散冰也云○延喜式宮内省式曰凡藏冰之處收冰多少及冰厚薄每處具錄元日群臣未喚之前省輔已上將本司入奏并進冰樣○同主水司式曰水池風神九所○同抄云宮内省冰樣奏至水司奏之此司屬宮内省冰樣者冰室厚薄寸法以瓦石為其樣奏之○公事根源曰少の多く、八代代の法、お乃、い、わ、ら、あ、ま、そ、ゆ、と、氷のゆり、と、大法秘法と、ゆ、り、る、○

國栖奏者○日本紀曰應神天皇十九年冬十月朔幸吉野宮時國樸人來朝之因以醴酒獻天皇而歌之曰云歌之既訖則步以仰咲今國樸獻土毛之日歌訖即擊口仰咲者蓋上古遺則也○延喜式謠曰凡諸節會吉野國栖獻御贄奏歌曲每節以十七人為定國栖十二人苗五人但苗二人夫國栖者其為人甚淳朴也每取山果食亦煮蝦蟇為上味曰名毛味其土自京東南之隔山而居于吉野川上峯峻苦深道路狹峨故雖不遠於京本希朝來然自此之役屢參赴以獻土毛其土毛者栗苗年魚之類焉近世吉野ヨリ參ル事絶タリ○公事根源曰今の氷乃奏とて歌とてハ、苗ハ諸書ヲ考ルニ元日ニ不限七日ノ節會又踏歌節會五節

ナントニモ見エタリ作者心得へシ但始ヲモテ正トスレハ
早春ニ許用セリ云○腹赤者○肥後國風土記云玉名郡長瀨
濱在郡西昔者大足彦天皇誅球磨曾啖還駕之時泊御船於濱云
又御船左右游魚多之棹人吉備國朝勝見釣之多有所獲即獻
天皇勅曰所獻之魚此為何魚朝勝見奏申未解其名正似鱒魚
耳歷御覽曰倍見多物即云尔陪佐尔今所獻魚甚此多有可謂
尔陪魚其縁也云篤信云鱒又倭名腹赤○聖武ノ御時大宰府
ヨリ是ヲ奉ル今モ筑州千年川ニ鱒多シ千年川太宰府近云
○公事根源曰腹赤の贄として英と流雲よりなり者、襦て節
令なるとは仍、くく、腹赤は食根と云、喰くは、以て居る所にて喰
り十三代景行天皇筑紫の長瀨にゆへ人、是と約する其後、四十六
代聖武天皇の御時天平十六年正月十四日大宰府より是と奉り
て、其毎の奉りたる儀と云、きき、定まらざり、腹赤と云、新の魚乃
ゆへなり
年中行事 初、ま、い、世の例乃、長瀨に、是、腹赤、代、云、乃
哥合 四十二位
中將

院拜禮

大府記曰延久五年正月一日辛巳院拜禮午到諸
卿以下參集次垂晝御座庇御簾同次御出直御裝束也次

関白前太政大臣右大臣并大納言中納言參議以上一列庭中
次殿上四位以下別當判官代等一列拜舞了之後從上筋次第
退還○中右記曰院拜禮可候否事之條年首拜禮者臣拜君也
非公儀不可謙仰被申可候之由○是院拜禮朝拜等凡下之年
礼之意也云○古今著聞集云仁平九年正月一日八条太政大
臣七十二ニテ立給ケリ一度拜シテ二度拜シ給ケリ此事礼
記ニ見エタリトカヤ○雜談抄云礼王制篇曰八十拜君命一
坐再至ト云義ニヤトイヘリ

祇園削掛

多力カク元朝宣冠紀事云晦日子刻祇園社神前灯燭之外
悉滅火暗中參詣人恣口而斥言他人瑕

疵假令雖聞其声知其人不爭之不限之是懺悔伐而勸善懲惡

之微意乎房州千葉笑亦此類也且刻許執行棄腰囊社司前驅

而執行登拜殿向神前而默坐少焉誦經咒東西柵內預建削掛

木左右各六屯是表十二月之數是称卯杖而同時燎之傳言其

炮向西則丹波国来年五穀不熟向東則近江国又然也依此石

西国之豐凶故居西方人高声呼近江近江東方人謂丹波丹波

歛避其炮气也其后社司新汲井水以削掛火調元朝之供物是

新年改水火之義也參詣諸人亦携其火而飯家煮元日之羹云

○神社啓蒙曰祇園社在山城国愛宕郡八坂郷所祭神三座于

頭天皇神代卷五男三女神八王子東神代卷五男三女神少将井西神代卷奇稻田

姓○根元抄云昔常住寺十禪師山如大法師依神託負觀十八

年奉移山城国愛宕郡八坂郷樹下其後昭宣公感威驗壞運臺

宇建立精舍云歲德神元方柵紀事云陰陽家因来年之支干而

同每家向其方高張柵飾葦索建松竹献供物并燈火而祭之是

謂年德柵凡新年出納物飲食類必先献之神仙參詣万事經營

始自此方云蒲蓋内傳云年德神者頗梨女所謂八将神母也北

天竺吉祥天王舍城王号商貴帝遊戯三界探題諸星名天刑星

降娑婆界改号午頭天王毘盧遮那化身頭戴犢肉猶如夜叉形

類人間雖求后妃而未得時有青鳥自空飛来似鳩呼曰我是天

帝使者與天王本同仕帝歎我名曰毘首陀羅天王今欲得后妃

故天帝令我教告南海有沙渴羅龍宮是有三女第一金毘羅女

第二婦命女嫁北海龍宮

難陀拔

第三頗梨女負甚美羅為君可

宜之天王大歡乃赴南海其道遠八万里程也凌南海到龍宮

道此間有巨且龍王出迎天皇遂娶頗梨女既而經年誕八王子是則八

將神大歲神大將神大陰神歲別神也此歲德神甲巳歲寅卯間丙戌

辛癸年巳午間庚乙歲申酉間壬丁年亥子間鎮座也云世倍此

方二向テ其年ノ有徳ヲ祈ルモノナラシ

毘沙門功德經 若夷 夷廻 大黒舞

紀事云 京師街

頭賣鞍馬毘沙門天紙符并弱惠美須等福神之筒四民買之貼

門戶或供歲德棚元日拜之祈福索祚南都市中每年自吉野來

賣守福神之札元日曉巡市中高声謂須迎辯才天若有求之人

則賣弁才天之札二日曉又謂須迎毘沙門天則賣毘沙門天之

札三日曉又謂須迎惠美須猶京師元日曉天賣弱惠美須之札

云○雜談抄云古老傳云往昔八元朝寅時二大神人禁裏日花

門ノ外ニ參テ毘沙門經ノ文句ヲ訓讀ニ唱テ祝ノ儀ヲナセ

リ故ニ此者ノ黨類ヲ呼テ唱門師ト稱ス又元日毎ニ夙ニ候

スル故夙ノ者ト号ス夙ノ字音志久世誤テ志由久ト云夙ト

病ト音近キ故カ民家ヘモ元朝末明門へ來リテ毘沙門經ヲ

訓讀セシ事中古迄侍シ也當世絶テ沙汰ナシト云毘沙門天

功德經曰欲奉仕毗沙門者毎月元三日清身著新衣向東北方

称念毘沙門名号者得大福德決定無疑云○夷廻者是即傀儡

師ヲ云津国西宮ニ跡ヲ垂玉フ夷三郎殿歳ノ始ニ衆生ニ笑

ヒヲシイサマセテ富貴ヲ守ラントノ託宣ニテ昔ヨリ西宮

ヨリ春ノ始ニハ都ヲ始方々傀儡マハシテ勧ムル也此傀儡

子ヲ夷カキ臣云鷺水モ夷廻トイヘリ又京大坂ニテ大黒舞ノ類ニテ夷三郎殿ノ姿ヲマ子ビ鞠ヲ鈎夕。ミサイナト囉モアレト是ハ悲田寺或ハ四ヶ所ノ垣外ノ賤キモノ、業ナリ
 ○大黒舞者是モ亦悲田寺垣外ノ類大黒天ノ姿ヲ模シ面ヲカブリ頭中ヲ著テ民間ノ門々ヲ歌ヒ舞フ年々嘉祝ノ詞ヲ以テ新作シテ唄フ故ニ此唱歌ヲモ大黒舞ト云フナリ夷大黒ノ事正月十日霜
 故事要言云幸ノ始ニ馬ヲ作りテ頭ニ戴キ歌ヒ舞モノ是ヲ春月甲子祭ノ下記ス
 春駒
 駒ト名ケテ都鄙トモニアリ是ハ禁中ニテ正月七日白馬ヲ御覽ノ事アリ是ヲ下ニウケテ侍ニヤ
 鳥追
 雍州府志云乞巧人自元日至十五日著笠以白巾覆面而敲手唱祝語倚門戶請米錢是号敲与次郎又称鳥追元民間出自追拂田疇鳥之

俳田疇鳥之
 俳者也云
 傀儡師
 事物紀原曰傀儡ハ漢高祖平城ニ圍マレシ時陣平力計ヲ以テ木ヲ以テ

美人ヲ劔テ城上ニ立冒頓因氏ヲ詐リ後人此ニ因テ傀儡ヲ為ト云○列子ハ周ノ穆王ノ時偃師トイヘル巧人アリ木偶人ヲ為テ舞シム王盛姫共ニ觀玉フニ舞終テ木偶人瞬目シテ手ヲ以テ王ノ左右ヲ招ク王疑怒テ偃師ヲ殺サントスヨツテ木偶人ヲ壞テ漆膠ヲ以テカラクリタルヲ見セ其疑ヲトクトイヘリ傀儡ハ夷廻ナリ其名異ナル故再出スニヤ○拾芥按云大井川靈所七瀬ノ下ニ傀儡居住上一町許仁治ニ四以在成説注付之云嘉録四年百首寄傀儡意
 大井川原のふゆや竹垣うきやゆやまきりさるらん の家
 為丸資慶卿記玉フハ傀儡ハ淀江口とのまほくもはまよくつるれとも

一、虎つろろんらりてはるまじ

猿曳

紀事云凡、京師舞猿者有六人倭倍祖公謂猿

麻波志又云猿牽獻赤繩於高貴家或舞猿作廐稜云是馬權神

ト云廐ノ神ヲ祭ル稜ナリ正五九月祭祀ス○本州綱日時珍

日繫猴於廐未詳其義按月令廣義曰除夜祭門

辟馬病據之乎神注道家謂門神左曰門丞右為戶

尉蓋司門之神其義本自桃符以神荼鬱

壘辟邪故樹之千門云本朝亦據此意乎門松立松飾松

飾竹世談同答曰門の松多半ハビ〜

用ろろ〜一条禪圓乃湯況依きろろ〜○篋蓋ノ説又其所以アル

ベレ一書云歲始每家食煮餅也門樹松竹也飾蒙繩也皆我

神國之遺風焉相傳 垂仁天皇時大已貴尊論大田田根子命

曰元月元時以赤白餅祭吾荒魂天刑大神國中無災而幸福續

凡節辰祭皆始大田田根子命此命常見神如談人故利世祭礼

習傳而見行云○紀事云凡新年之賀儀各有方土之異有一家

之例其式様不一惟家内之葦索并門前之松竹者夏夷共同之

倭倍正月門前左右各建松竹一竿上横竹兩竿其外面挿昆布

果實等物名稱門松或立松蓋孟春之月祝戶義乎云○禮月令

集説曰戶者人所出入司之有神此神是陽氣在戶之内春陽氣

出故祭之○錦繡萬花苔董一勳答問曰歲首祝折松枝男七女

二以為藥飲云○史記龜策傳曰松栢為百木之長而守門回○

徵祥記曰王者德至於天和氣感而其露降尊賢容衆不失細微

則竹葦受之○蕭穎子竹篇曰君子秉心惟其正直云松竹ノ目

出度例ハ和歌ニ

享 三行ふかたなりみりもまを今もわかれまをり

後拾遺 五月廿七日乃ねとまらちをりてふ代とるん 延暦元年

續千載 ねのくハるあ代とつらん日九を乃屋のうれ竹 後條院

飾繩 飾藁 注連飾

神代卷曰時手カ雄神則奉兼

是中臣神忌部神則界以端出之繩乃請曰勿復還幸云云 ○土佐

日記云のありくわふといふは注連の事 ○世諺回答曰志の繩とふ

ものらね繩よりそ繩乃ととねぬものたは清浄なるいれ

るは以るへぬとすかとなるむり清浄とてこの由は神事の附

かひは注連の正月の祓と祝多る也 ○釈名云注連いゆはくは

るもくか入といふはしりなり繩かたにたり繩はくかむく ○荆楚歲

時記曰正月朔日帖畫雞戸上懸葦索於其上挿符於旁百鬼畏

之云藁稿同 ○説文曰稗禾莖也即稽之和皮者也祭天以為席

又凡米穀繫生命至寶無衆草加之者神明賞美之洗米散米新

薦注連等最所重也云和漢用葦索之意可知也 ○後成恩寺殿

纂疏曰九繩端出此釋其義又解其訓繩者直之儀神道以直為

本尤者陽德取清明之儀端出者絢索而不整雪其取餘之芒端

也是質朴而不飾之意故以直清質為神明

之德一條之繩而具此三德即注連也云

王率后妃八王子及諸眷屬到廣遠國滅巨且族其斷巨且屍配

五節供行調伏威儀所謂享年門松巨且墓驗木而上結炭準送

火炉也云 ○本草綱目曰白炭除夜立之戸内亦

辟邪惡云可據辟邪惡之義蓋蓋之說如何

飾海老

紅 蝦

飾炭

蓋蓋内傳 曰午頭天

倍謂之伊勢海老或称鎌倉海老以為賀祝之者因倍春盤用之
 ○時珍本草曰蝦音霞倍作蝦入湯則紅色如霞和漢三才圖會云勢州相州多有

之狀詳見于此書

橙拾物論云橙橘屬樹高枝葉不類於橘亦有刺云頰和名曰橙似柚而小者也

和名安倍太知波奈○和漢三才圖會云橙樹高丈許周過於尺其葉扁大似乳柑而短背色淡五月開小白花凡歷八年者結實也形山其氣苦臭霜後黃熟其瓣苦微酸不堪食至春色濃耐久夏後變色青新舊不可辨故倍呼各代々雖不嗽而以為嘉祝果

也 懸鯛 本朝食鑑云本朝每歲始千門萬戶令雙青松雙青竹相對而立向上橫引于注連繩而中間懸于干鯛

雙尾海老煮紅一箇及橙橘白柿昆布海藻裏白讓葉等數品官家用大千鯛其餘中小任意用之号曰懸鯛是祝壽耶辟邪未知

何然但我邦之舊流例也○紀事云元日小鯛魚一雙以藻索結

兩喉挿齒朵并由都里畢懸竈上是称掛鯛至六月朔日和美而

食之如此則辟溫疫痢病諸邪氣也

若水包井井華水若水桶

江次第曰供立春水事舊年封御生氣方人家井一用之後廢而

不用之自御厨子所付臺盤所女房供之於朝餉土高坏上置折

敷和紙大土器盛立春水居折敷供之陪膳居之於高坏上一度御

飲畢徹之○世談回答曰くわく井華水くわく御氣くわく

○公事根源曰菟玉の香くわく日先くわく

況立くわく○御筆云乃小立くわく元日くわく今事

本朝食鑑云今有称堀井者能察地中水脉之

好處鑿之成井其淺深據水脉也不時初汲曰新汲水若人既汲之後汲之者非新汲水平且第一汲曰井華水○紀事云元日朝諸家新汲井水是稱若水俵倍以若字代老弱之弱而用之云是以元朝為若水也○嘉祐本草曰新汲水却邪調中下熱氣宜飲之○世本曰伯益作井黃帝始穿井井者穿地為井汲瓶汲水謂之井○釈名曰井清也泉之清潔者也○釈名云井づるは乃ちまじくしと略せり一説わくわつとも云着後代のやく家に井がくく一和よわつとも汲る也○桶糴勅曰汲水器也○釈名云にけはけり井わくくし○包井衛生氣ノ方ノ井ニ蓋ヲシテ立春ニ用ヲ包井同ト云ナリ

大服

大服者点茶之名也○紀事云

其式点茶或漬塩梅椒於茗碗之内而合家飲之又獻賀客是謂大服用梅高年後面皮生皴而款傲監梅之皴面也椒服之令人身輕能走風○淡海志云正月詞ニ祝テ勢田ニハ大服茶ヲ点テ吹夕リ廻シリト云テ吞矢橋ニハ是ニ異ナリ旱ニ粥ヲ食テ今日ハ能カイ日和ナリト云ト云是互ニ旅人ノ多ヲ悅ブ也○今式云大ゆくとく中古極わるといふはびく服と云ふ字なれどゆふかすともゆふゆひとく松湯蘭如くは能く人者ぶくゆふもゆふど禍福其詞もんやとて○大服やと口より名く壽福縁と云へばゆふ年類縁の愁わけて服と云ふゆふと云○雜談抄云六十二代村上帝六波羅密寺ノ觀音ヲ信敬シ玉フ或時御腦ノ事アリ醫藥驗ヲ失フ當寺ノ本尊靈夢ノ告アリテ供スル所ノ奠茶ヲ服シ玉ヒテ御腦平愈シ玉ヘリ然レハ主上ノ服御スルヲ以テ王服ト稱シ毎歲元且ニ當寺ノ供茶ヲ召テ服シ玉フ由縁起ニ出云又足利家ノ時茶道盛シノ故ニ始ト云

若餅

三日ノ間ニ搗ヲ若餅ト云由古老イヘリ○雜談抄一説云三日ニ餅搗事有ヘカラス倍ニ餅ノ大小ヲ

云時少キヲ若ト云是小ノ詞ヲ忌テ云是賀客ニ饗食スルニ便リ有ユヘニ少キヲ賄フル故ト云唯可為祝語而已○庖厨本草云俸名抄祝名餅合糯麵合并也胡餅著麻者細注倍云餅粉阿連是也元昇曰此説ヲレハ今倍用ル餅也云

雜煮祝

祝 紀事云元日朝良賤食雜

煮又盛雜煮并飯汁於小土器而供神仏又祭竈并并凡今日良賤調味多用鯽魚鯨魚鰯魚教子鰲海鼠串石决明并午房大根等云○雜談抄云雜煮ハ餅ニ大根羊躑鳩昆布ホアハビイリコ菘等ヲ加ヘテ羹トシ喰フ多種ヲ交ヘ煮ル故ニ雜煮ト称スル歟是ヲ畧メ羹ヲ祝フト云○事文類聚曰唐立春日春餅

生菜辨春盤齊人月令曰食生菜取迎新之意○羊齋拾唾曰元朝餉餅事汀州嘉靖丁亥志曰汀國人ハ餅ヲ春テ賓客ヲ餐ス

貧キ人ハ市ニ買求テ節会ニナスト云 いしりみ 羊頭ヲ云頭ヲ頭ト云テ所謂

三ヲカリテ云羊魁正月及嘉祝ニ必用之者取多子之義也

躑鳩 陽国志 結昆布 雜煮ニ宛テ結昆布ヲ加フルハ正月

傳倍悦フト云義ヲ含ム 大根 齒固ノ具并雜煮ニ用フヨ

ニモ見ユ○韓保昇蜀本草云菜服倍名蘿蔔按今雅云突蘆龍

孫炎注曰紫花菘也倍呼溫菘似蕪菁大根 開午房

倍名突蘆猶見冬之部春季ハ鏡州ト云ヘシ

開豆

紀事云用豆水煮大豆是謂用豆用午房不煮而生午房也如菁木盛之仍謂之菁木午房又曰用午房兩種

共土器盛之而

大箸

又謂之羹箸說文曰箸飯飲也从竹有聲今倍作筋或作櫛○韓子曰商紂始

數於齒菜櫛云

以象為之○頌和各唐韻云筋波之匙也字亦作箸倭倍用歲始

箸尤大故是謂大箸○雜記抄云箸ノ折ハ落馬ノ相ト云將軍

義勝幼少ニテ治世ノ時元朝規式ノ箸折夕リ其年秋落馬ニ

テ失玉ノ御舍弟義政續テ治世時箸ノ不折様ニ家臣ノ取計

ニテ本古實ニ非ス民間ノ用

蓬萊飾

食積

紀事云倭倍新

年三方臺置海光熨斗昆布榎橙穗俵等先供賀客祝新年是謂

蓬萊臺云是唐立春日春餅生菜瑞春盤而以賞之○史記本記

曰海中有三神山曰蓬萊方丈瀛州倭人居之○列子曰渤海東

有山一曰岱輿二曰員嶠三曰方壺四曰瀛州五曰蓬萊華實皆

有滋味食之不老不死所居人

穗俵

莫鳴菜本朝式曰奈々里曾神馬藻○漢語抄

曰奈乃里曾○倭名抄曰本文未詳神馬莫騎之義也○和漢三

才圖會曰此藻莖細扁長三四尺最長者丈許而有節小榎上有

細尖葉一團結小山子中空撚潰之有音出水初正青乾則黑色

西南海多有之冬取乾之以葉釋一握許折卷束之豫作采俵形

名穗俵為正

榎

本草綱目曰栢萩名榎側栢蕪頌曰三月麻花

月蓬萊盤飾○九月結子其實成栢狀如小鈴○史記曰栢栢

為百木長○漢武內傳曰藥有栢栢之膏

友のしん

小土器也名義

未詳疑クハ用豆用午房ノ兩種ヲ土器ニ盛テ雜煮ノ膳ノ九
右ニ置之此兩種ヲ盛ル物ト云ノ畧語歟又料ノ物ト云是モ
亦兩種ヲ盛
搗栗 和漢三才圖會云搗栗連殼晒乾稍破時
料トスルカ 搗曰去殼及茯苓皮則肉黃白色堅味其美

倭倍搗ノ訓ヲ勝ノ字ニカヘテ
諸勝負ノ利アルヲ悅テ用之
串柿 同書云貫竹串乾者
也或貫繩乾之共下

品也按此物其形狀似串海鼠故為嘉祝之物而用飾菓或蓬萊
臺欵○酉陽雜俎曰柿有七絶一壽六嘉賓云○雜詠抄云萬物

ヲ抵トルノ義ト云リ柿ト抵ト和訓近故ナラシム凡槌搗栗
串柿昆布抽柑柑子橘鬩斗梅干等ノ類飾ル心ナクテハ歲始

ノ嘉種トナルヘカラス皆物々當
季ヲ專トシ又雜ノ物アリ下准之
橙 注見
柚柑 和漢

圖會曰檨檨柚屬也其枝葉花皆與柚無異實形
狀亦似柚而最大云柑類惣名橘也故為祝物乎
柑子 大和

云包橘一ヨリ小也皮薄ク瓢ノヘムテ上ヨリ見ユ○時珍本草
曰包橘外薄内盈其脉辨隔皮是也○唐故事曰近臣賜黃柑以

黃羅包之人各一
枚是為傳柑宴云
橘 和漢三才圖會云太知波奈和名橘類總
名也今單稱太知波奈者乃包橘也專為

果其皮為藥者乃蜜柑也云○大和本草橘ヲ蜜柑トシ又一種
遠州白和柑子ヲ為真橘○時珍曰橘品十有四韓彦直橘錄詳

也○月令廣義曰正月初二日賜橘於群臣則古今以橘為嘉祝
之果○日本紀曰垂仁帝九十年春命田道間守遣常世國令求

非時香菓今謂橘者是也聖武帝天平八年鑿葛城王之忠誠賜
浮杯之橘勅曰橘者果子之長上人所好是以汝姓賜橘病稱橘

華家三才圖會

姓始于此橘病祢者諸兄ユツク **楨** 文讓木 支物異名 子絃葉 万葉和公也仍為嘉祝之物也 漢三才圖會ユツク 讓木倍作楨 ○

字彙曰杜音圖旗竿也又橋也 ○埃囊批云杜ノ字ハユツリ葉也世倍正月ニ是ヲ用漢朝ニハ旗ノカザリトスル由也 ○

枕草子云かへての月にはあともみえぬもの、あはれの二十日の夕時ゆきかひく乃ゆきあざとわねるるに又たさかしくよひのさ

齒固の貝も、つづみんちと云、此樹ハ新葉生ト、ノミテ後ニ舊葉落故ニ讓葉ト各ク又和名親子草ト云共ニ和歌ニ詠ス

齒朶穗長裏白

本草綱目時珍曰貫衆此草葉莖如鳳尾其根一本而衆枝貫之故

名鳳尾根名貫衆云 ○和漢三才圖會曰葉似蕨及狗脊而葉柔薄而青背白四時不死以飾丸且嘉祝之物云一說齒朶ハモロ

ムキト云和名アルヲ夫婦ノ相生ヲ祝ストク又一說齒朶ハ齒ハヨハイ朶ハエダ朶ハ長延ナル物ユハ齡ノ延ル義ト云

昆布

本草綱目曰生東海頰流而生出高麗新羅者葉細黃黑色柔韌可食云 ○和漢三才圖會云其大者一株而

為林葉長二三丈謂之長昆布大低幅四五寸長二三尺海人用鎌刈取之松前之產為最上專為嘉祝之物和名似嘉字之訓故

字 ○頰和名曰比呂 米一名衣比須女云

葩煎

字彙曰粳米爆米曰粳 ○經驗方曰稻米使爆火食謂之白花米 ○

米花急就草 齧 周處凡士記

○袁仲郎詩集云爆糯穀於釜中名學毒

昔八元日賣之蓬萊臺ニモ敷之ト也今世用白米晝後因ニテハ葦索ヘモ白米ヲ包テ付

尉火斗

常為嘉祝之供五万米 魁與艸尉斗並用尉斗

是ヲトミト云富ノ字ノ意

人代之人ノ形狀ナリ肩イカリテ腰ホソク寿ハ万歳ヲ保ト
 古書ニアリト也○ト部古事記曰天照太神伊勢国五十鈴川
 上ニテ神代ノ人形ヲ字ハセ玉ヒテ
 野老 本草綱目曰草
 野老 辭作蔓生苗葉
 野老 漢語抄莞延喜式○和漢三才圖
 俱青作三义似山薯云○野老 蔓葉類似薯蕷用小白花結青子三稜其根類老薑薯蕷之狀
 最肥大者如甘藷而黄色有節多長鬚倍以
 海老 委見于上
 為野老以艱為海老共充嘉祝之食物云

梅干 梅がう

漢三才圖會曰白梅又鹽梅霜梅倍云梅脯也豐後之產肥大肉
 厚味美云梅干ヲ梅ボウシトハ倭倍宝珠ヲ疑宝珠ト云カ如

本草綱目曰梅其實酸曝乾為脯又
 入羹臠菹中又含之可以香口○和

少如意宝珠ニ比
 セル賀詞ナルヘシ
 俵子 名義未詳按ニ奥州金花山ニ近
 キ海ニテ海鼠ヲ取ラ金海鼠云

其形狀恰如俵形仍祝語トセル歟○春耕糸切齒云俵子ゴ
 メ也小殿原ハ武家ノ祝語田作農家ノ祝語俵子商家ノ祝語
 ト云○雜談抄云和倍海鼠ヲ呼テナマコト云贅海鼠ニ對シ
 テ也俵子ト云其義未詳按ニ此者ヲ子ト称ス子ノ貴キハ太
 郎ト云ヨツテ太郎子ト云ヘキカタワラコト略シテ云ニヤ
 太郎ハ男子ノ称也此者海男子ノ名アリ可思合此者ノ形男
 根ニ似タル故海男
 子ト云云鑿說ニヤ
 田作小殿原 和漢三才圖會云五万
 米魁也正字未詳一名
 田作又云古止乃波良漁家海邊石上或箕上擲乾小魁也阿波
 之産為上貯之耐久和諸物煮食常為嘉祝之供與鮑厨斗並用

押鮎

江次第曰元日押鮎一杯煮鹽鮎一杯云土仇日記ニモ云
且見工押鮎塩鮎ヲ云ナリ○大和本草云兩航雜錄

云香嗅鱗細不腥春初生月長一寸至冬月長盈則赴潮際生子
生已輒稿一名記月魚云又年魚ト云其年生ノ其年長スル故

也仍為新年嘉祝之
食鮎處之ニ可見之

海贏身

和漢三才圖會云海蝸倍云波
比生海中小螺也色狀似田螺

而堅大於田螺春夏共多出其肉上黑中白盤曲隨殼有蒼腸去
腸煮食之其鹹商賈每除夜及歲始為

螺看

本草綱目曰蝸
贏秋名螺師時

必用酒者言取千倍万倍貨殖之祝乎
珍曰師衆多也其形似蝸牛其類多故有二名惟食泥水春月人
采置鍋中蒸之其肉自出酒煮糟煮食之云

數子

同書云
之子也

此物為新年之酒者似海贏故並用者乎
腹出麵乾之黃白色為上臘月歲始及婚家以為
規祝之者取多子之義同以蝦取海老之義矣○

籠煎賣

字彙說見于上○和漢三才圖會曰糴音糴糴同棋州天王寺民家
用河內上糯米穀畧濕而熬之爆脹而穉自脫去潔白如雪花云

昔ハ正朔ニ家内ニ撒之ト賣アリテ賣ル說アリ今絶ユサレ凡
今モ其遺意ニヤ棋州今宮ノ戎市ニ賣ナリ又一說聖德太子

年男

紀事云汲若水
人謂年男煮此

守屋大臣ヲ討玉フ時稻皆ハセテ
兵糧ノ助トナル是ヨリ始ト云
水謂福沸云年男ハ其家々人ヲ撰テ定之先旧年煤掃ノ竹ヲ
以テ拂ハシメ除夜追儺ノ豆ヲ撒シムル事各當年ノ惠方ヨ

リ初ム是年男ノ役トスル處
春未猶家々ノ嘉例勿論ニヤ

庭竈

紀事云置火炉於庭上
合家鋪席而團座是謂

華實年譜 卷之上 二十三

庭竈云庭○說文曰庭宮中也从广廷声云然而庭竈ハ且テ宮中并宦家ニ其沙汰ナシ唯民間ノ祝儀ナリ倭俗民間ノ坪ノ内ヲ場ト云庭字モ亦並用也竈○同日竈炊竈也从宀龍声○和漢三才圖會云竈炊飲食資生命之重器恐有神每為清淨可也○旧事本紀曰與津彥與津姬此二神竈神也○酉陽雜俎竈神狀如美女名隗姓張名單字子郭夫人有六女常以月晦上天白人罪過云畿内ニ竈ヲ荒神ト崇メ平常清淨ニシテ香華及供物ヲ備ヘ祭ル月晦ニハ修驗者ヲ請ニ於竈前奉幣シ誦真言以為荒神禳是酉陽雜俎ノ說ニヨル歟

福藁敷

福藁

紀事云家庭敷藁是稱福藁○雜記抄云民家尋常不常ナル故正月ノ神ヲ祭リ勸請中不淨ヲ除ク心ナ

ルヘシ譬ハ庭道ヲ設テ神輿ヲ行シム義ニ
同云又唯賀客ヲ送迎ノ為トモ見ユルナリ
福沸 福鍋

紀事云汝若水煮之謂福沸云福鍋者用福沸之名也○雜記抄云和倍ニ七日ノ粥ヲ呼テ福ワカシト云是福トハ餅ノ異名也其故ハ古ヘ福引トテ餅ヲ二人シテ引合事侍リシトヤ其上餅ノ異名ヲ福生果ト云リ今朝粥ニ餅ヲ和シテ煮熟スルヲ云ト云野州邊ニテ鏡餅ヲ福出ト稱ス福生果ヨリ云ニヤ或說正月四日ニ神棚ヘ二今日供シタル飯汁羹ノ類ヲ徹スルヲ福サガシト云是ヲ集メテ
一ニ煮熟ノ合家食是福沸也

毬打

續日本紀

曰聖武天皇神龜四年正月教王子乃諸臣子等集春日野而作毬之樂○頭昭神中抄曰十節錄云黃帝取蚩尤頭毬之令

毬杖是也。以彼例漢土年始用。件華國中無凶事。仍日本國字。其
 例打毬者。○增韻云。毛毬古謂之鞠。○唐僖宗傳記。僖宗能擊
 毬。謂優人曰。朕若忘擊毬。進士舉須作狀元。○世説同答曰。虫丸
 と。其人黃帝に。わい。ゆへ。この悪。良。疫病。う。ふ。津。よ。り。て。國。古
 の人。武。ま。り。が。せ。う。末。の。世。小。疫。病。と。か。ら。う。ん。ね。ま。実。を。う。ま。り。と
 け。い。か。ま。ら。て。む。し。た。た。こ。さ。い。ら。う。事。に。月。か。の。眼。中。れ。人。を
 と。ぬ。き。て。本。丁。の。む。ら。さ。か。ら。せ。り。か。の。眼。の。う。ま。ん。と。ま。わ。り。し
 り。う。つ。つ。時。乃。ゆ。ら。ん。こ。ま。小。疫。と。ま。り。中。れ。人。を。い。の。ま。り。り
 ぶ。ら。ぶ。の。決。正。月。れ。し。ら。彼。肉。なり。鳥。頭。漢。は。び。げ。大。棍。を。こ。し。と
 り。つ。ら。う。も。お。せ。り。世。尔。六。帝。の。う。ら。の。い。の。か。し。ら。う。ら。り
 て。い。わ。し。疫。病。津。と。う。り。て。人。を。な。す。あ。わ。ら。う。い。ら。り。と。こ。こ
 ○本朝神社考云。正月於真言院所擊之毬者。行神泉苑是也。

其柏子所謂法成就之池者。謂神泉苑也。○拾芥抄曰。真言院在
 八省北。○雜談地云。万葉ニ玉キハルト詠ルモ年始ノ毬步
 ヲ云増韻又唐史ニ云ハ毛皮ニテ作ル日本ノ蹴鞠ノ鞠ニ類
 セリ日本ニハ木ニテ造ル近頃ノ由也。必竟今世女子ノ蹴フ
 手鞠ハ毛毬ニ近キ者也。昔ハ木毬ハナカリト也。然。正。後。成。恩
 寺殿ノ世説同答。木丁ト遊サレタレハ其頃モ木毬ニヤ。唯男
 兒ノ翫。ア。地上石間ニ擲ツ便ナラニ。後鳥羽院ノ雅キ御時ニ
 殊外毬打ヲ好ミ玉ヒケレハ。文。覺。上。人。故。アリ。テ。禁。獄。ノ。時。腹
 立テ此帝ヲ毬步ノ冠者ト署ラレケル由。平家物語ニ侍ル又
 信ニ振々ト称シテ毬ヲ拂フモノ有。毬杖ト云者ニテ杖ノサ
 キニ付ル者也。當代ハ古来ノ模様ニ。實メニ三歳ノ幼兒ニ少
 毬步ヲ紙上又ハ薄板ニ帖シ。鶴亀松竹ナト造テ是ヲ毬步ニ

雜談地

卷之十一

三十三

限ルヤウニ称シ其餘ハ玉振々ト各別ニ呼ブ大ナル非也イ
 ツレモ木^{ゴウ}丁^ト称ヘシト云今玉振々ト云ハ即千昔ヨリノ
 方ニテ腰物ノ目貫縁頭ノ繪様又ハ諸具ノ詩繪ニモアリ其
 形状玉ハ大戸ニ付ル戸車ノ如シ室冬ノ内ノ七宝ト云物ノ
 如ク彩ル振々ハ木ヲ八角ニ削リ両端ヲ細ク中ブクニメ
 細キ方上ノ方丸右ニ木尻形ノ穴ヲ穿テ此処ニ前件ニ云
 ノ玉ヲ付テ惣躰金箔ニテガミ其上ニ鶴亀松竹射虎等ノ繪
 ヲ彩色ニスルニ用ル時ハ丸右ノ玉ヲ取ハナシ別ニメ是ヲ
 擲ヲ玉トシ八角ノ木ノ木尻形ノ穴へ竹杖木杖ノ如キ棒ヲ
 貫キ柄トシテ是ヲ玉ヲお毬杖トス略ノハ皆己ガ得物ヲ用
 ○紀事云北野宮寺奴僕自元日
 至^下三日出右近馬場撃毬^ト

羽子板 胡鬼板

世談同答曰雅きもの胡鬼の子よくはきぬるハうらやまの答云
 おあきめのぬよくはねたりい秋のうらやま蜻蛉といふまきそ
 ぬとともう物とあきけ子といふ本蓮子がはねるがうらやま
 とはなつていふこと板をばきわかれはつてあきめとあき
 りとぬとをわかれんといふこと○雜談抄云蜻蛉ノ蚊蚋ヲ食フ
 事本草ニモ注セリ此板ヲ羽子板鬼板ナト云リ表ニ譬ハ大
 臣家ナトノ内々ノ祝儀ノ体裏ニハ爆竹ノ体ヲ画タリ寸法
 不定○一説羽子板ハ神功皇后ヲ女武者ノ祖ト仰テ己未
 楯板ヲ表シテ女ノ翫トシ羽子ノコハ矢ニ象ルト云
 ヤリ羽子爆竹ハ子ト云事僧山井ニ出名義未考

破麻鬼

弓 破魔矢

世談同答曰蚩尤ハ眼の腫を抜く本下の子
 破眼のやうん三重のりしゆら射る附

の的ニニ事ハ画ハく中ハ睡ヤ除く○雜談抄或説云然ハ
正月ニ射戲スル濱弓ハ蚩尤ガ眼ヲ射破ル義ナレハ實ハ破
目弓ナルヘシ通唱ノ宜ニヨリ濱弓濱矢ト称ス又魔ヲ破ス
ルノ意ニテ破魔弓トモ書濱ノ字ニ心ナシト云○或説云弓
ハ不祥ヲ殺フ物ナレハ中大邪氣ノアル時ハ必ス弦ヲ鳴メ
殺事ノ故ニ神道ニハ採物ノ中ニ弓ヲ用ヒ佛家ニハ弓矢ヲ
定慧トシ又惡魔降伏ヲ表ス故ニ吾邦正月ニハ王宮神社ニ
射礼ヲ行ヒ或ハ士人小兒ノ弄トスルノ是年中ノ邪氣ヲ殺
為ナリ故ニ云破魔弓其所由來者尚矣故ニ異域モ已ニ評之
北史卷四十四倭國列傳曰每至正月必射戲飲酒其餘節略與華同
文獻通考日本部七此事アリ是
治世モ武ヲ忘サル意ニヤト云

年玉

紀事云正月士農工
商及僧徒神官各執

贊互相賀凡新年互贈答之物總謂年玉○雜談抄舊事本紀五
神武天皇元年紀曰歲辛酉正月庚辰朔宇摩志滿治命先獻天
端亦堅神楯以齋兵譜五十楯亦云今木刺綾於布都主銀大神
奉齋殿內即獻天璽瑞宝為天皇鎮祭之時天皇寵異特甚詔曰
近病殿內無因乎足尼其足彦乎自此始矣云此天ノ瑞ヲ奏セ
ラレシヨリ代々ノ天皇元日之朝賀奏瑞トテ二人ノ者庭ニ進
テ去年ノ目出度嘉瑞ヲ因々ヨリ申セハ夫ヲ記シテ今日奏
祝スル由也是皆君ヲ賀シ世ヲ祝スル礼義之信ナリオホ口
ケナガラモ民間ニモ年始ニ音物ヲ相互ニ贈答スルモ人ヲ
賀シ春ヲ祝スル祝義之信也唯和倍年玉ト称スル自瑞宝之
義ニ相似タルモ宜也今梅
年玉八年ノ賜ノ略語カ

寶引福引

雜談抄云餅ノ
具名ヲ福生果

ト云故ニ餅ヲ福ト云古へ福引トテ餅ヲ二人シテ引合事侍
リト云福引室引是ニ始ルニヤ撰州箕面辨才天ノ社ニ毎歳
正月七日富ノ行事ヲ修ス得之者必幸在テ萬家ニ充ルト云
是モ亦福引ナリ其外家々嘉事トノ品物ヲ撰集テ合家園取
ニシ或ハ繩ヲ付テ引テ得之

弓始

甲陽軍鑑弓書曰弓始ハ正月七日也豹尾黄

福引ト云或ハ室引ト云
藩ヲ忌也是ニヨリテ豹尾ノ頭ヲ踏テ黄幡ノ尾ヲ射ヘシ此
時ノ足踏ハ一番ニ用テ足留ルニハツホム足ヲ射ヘシ是ヲ
陰陽ニ象也○陰陽曆曰黄幡ノ方弓始ニ吉云七日ハ禁中ニ
モ御弓奏アリ武家はニヨルカ○本朝軍器考云弓夫為利器
之第一況至武家源平及諸氏之良將群卒未嘗不事控弦故男
子生則挂衆弧蓬矢而賀之有遠略称其人号弓取其名豈虚乎

頼朝定武家礼正月有弓始桃飯献物以弓矢為定額所々游宴
以笠懸流鑄馬為事云○河海抄曰我國ノ弓矢ハ伊弉諾尊ノ
御時ニ始レル也又日本紀ニ素盞鳥尊父母ノ神ニ逐レ高天
原ニ上リ向ヒ給シ時日神背ニ十箭鞞ヲ負ヒ臂稜威高鞞ヲ
ハキテ彌ヲ振起給ヒシトアルゾ此物ノ見エシ始云○秋名
云弓ハゆぐみ中略しつるゆぐみかる物し弓ハゆぐみかる物し又夫ハ弓
弓ハ秋日本紀ニ弓ヤ
馬乘初 雜談抄云陰陽曆馬乘初又毛馬
始云是ヲ以テ二事トス難心得
毛馬ハ称美ノ詞也武門ノ祝スル乘初ナレハカク云ニヤ又
一説ヒメハ馬ノ梵語ナリト未考云弓馬ハ元ヨリ武門ノ專
トスル処六藝ノ具ニナレハ弓始ニツイテ馬乘初勿論ナル
ヘシ○日本紀曰天武天皇十三年国四月詔曰凡政要ハ軍事

ナリ是以文武官ノ諸人務テ兵ヲ用ヒ及ヒ馬ニ乘事ヲ習フ云
 ○本州時珍曰按許慎云馬武也其字象頭髦尾足之形牡曰騊
 牝曰騊一歲曰羸二歲曰駒三歲曰駉四歲曰駉梵書謂馬為阿
 濕婆馬六月以十二月而生其年以齒別之云○周礼曰凡馬八
 尺以上為龍七尺以上為騊也六尺為馬○和訓義解
 云ムハ馬ノ音誤ノ音ニ也ムハマノ助紐也

蔵開

或説云正月ノ蔵開ニハ内裏ニテ三種ノ神宝ヲ御蔵ヨリ開
 始ト云○雜詠抄云和倍農工高貴ノ類歳始ニ蔵ヲ開テ積蓄
 ノ金銀米錢ニ不限一切ノ貨財ヲ取出シ用ニ充テ賣買ノ事
 ヲ調フ尤其年始ナレハ吉日ヲ撰テ庫蔵ヲ開ヲ云メリト云
 ○説文曰蔵物所蓄曰蔵又府蔵朱子曰蔵貨財云府○礼記疏曰亮蔵曰倉
 米蔵曰廩順和名曰困一云廩滿也一云倉奈一云庫乃久也

日本紀曰推古天皇十五年每国屯倉ヲ置ル文武天皇義倉ヲ
 立ラレ淡路帝常平倉ヲ置レ皆貧民ヲ救ヒ玉フ仁政ナリ北
 条越後守実時カ孫頭時カ子金澤越後守平貞頭称名寺ノ内
 ニ文庫ヲ立和漢ノ群書ヲアツム世ニ金澤ノ文庫ト云是也

湯殿始

雜詠抄云和倍ノ歳始ニ沐浴スルヲ湯殿始云云
 世倍ノ云処皆同然ニ藤大典侍ノ御房ノ御湯殿
 記ニ舟ヲ梅ニ御湯殿トハ臺盤所ヲ云臺盤所ハ倍云臺所ニ
 同シ故ニ臺所始ト云意ニテ湯殿始ト云ナルヘシ別ニ世倍
 初湯若湯ト云類ニ非ス年中人ノ生命ヲ繫ク食物
 等ヲ調フル其元ナレハ第一臺所始ヲ祝フヘキ也

飛馬

始

千梅雙纒輪ニ梁塵秘抄ヲ引テ飛馬始トカケリ春耕糸
 切齒是ヲ難メ云毛馬ノ二字ヲ書時ハ右ニテモ濟ヘシ

華家年譜
 卷之九
 二十九

曆ノ元日ニアルモノハ馬ノ事ニ非ス真名曆ニハ火水始ト有ト部家秘説ニテ是又馬ノ事ナラス深秘ナリト云或書ニ
 ヒメハジメテ云米ニ六ノ異名アリ内裏ニテハ米ト云其外
 ニテハ米米米米ナド云柳米穀ノ貴事五舂六根六識陰陽
 呂律米ヲ以テ此舂ヲ養フサレハ食ヲ炊ニ金竈水火薪イツ
 レモ木火土金水ノ五行ノ氣運ト集リテ飯トナル尤夕ウト
 ムヘキノ義ナリ然ハ年始ニハ第一米始アルヘキハ人壽百
 歳モ生命ヲ繫ハ此物ナリ○枕草子ミミヒリト云事アリ○
 春曙抄云褌糠衣々々也或説ニ非米非粥之義也云非米非粥
 トハ飯ノ類也米ハ蓬萊臺ニ始リ粥ハ七種ニ始ル飯ノ始ニ
 亦アルヘシ何ゾ馬乗初 **着衣始** 季吟云衣ヲ着初ル祝十
 アリテ毛馬始アラシヤ

論語郷黨篇曰吉月必朝服而朝朱子注吉月々朔也○季氏曰
 礼云正月吉所謂月吉也○雜談抄云曆云ニノ着衣トモ衣裳
 氏書衣ヲソトモ讀也衣裳ハキヌ
 ヲキト略モスソヲソト略タル也 **船乗初** 雜談抄云舟ヲ
 乗初トテ一歳ノ祝義ヲナス曆ニモ記之云撰別大坂ノ船乗
 初ニハ舟ニ松竹注連ノ飾リヲ立船具神へ鏡餅神酒寺ヲ供
 シ水主ヲ揃ヘ凡ソ一タン許乗出テ漕戾ト也其日船持ノ家々
 酒肴ヲ調ヘ合家嘉儀ヲ催シ年中廻船ノ海上風波ノ難ナキ
 ヲヲ神ニ祈リ自ラモ祝ト也○神代卷一書生鳥磐據樟船輓以
 此船載蛭兒須流放棄云○日本紀曰神武天皇戊午歲 即位三
 年前也 春
 二月皇師遂東袖臚相接友到難波碕○又曰崇神天皇十七年
 秋七月朔詔曰船者天下之要用也今度遣之民由每船以息苦

三十一

步運其令其因俾造船舶冬十月始造船○淮南子曰古人見竅木浮而知為舟○周易曰剡木為舟剡木為楫舟楫之利以濟不通○呂氏春秋曰虞舜作舟其外物理論化狐墨子巧倕山海經番禺東哲舜蒙記伯任世本其鼓貨狄皆是作舟之人也揚雄方言曰自開而西謂舟為舩自開而東或謂之舟○唐韻曰舶海中大舩也喚和名曰却與能布稱又曰舩小舩也○釋名曰舩三人所乘也與和名游舩波之布稱○唐韻曰舩舩小漢舟也和名曰豆利布稱○釋名曰舩舩小而深者曰舩和名太加世高瀬舟也又曰舩舩薄而長者曰舩和名曰比良木倍云平田舟○和訓義解曰ノ子ハウカブメグルノ上下略フ子ニ通又子ハ根也岩根岸根ニウカブ也

舟玉祭

撰津國凡土記云美

奴賣松原今稱美女者神名其神本居能勢郡美女賣山者息長帶比賣天皇幸筑紫國時集諸神祇於川邊郡內神前松原以求禮福干時此神亦同來集曰吾護佑仍諭之曰吾所住之山有須義乃木名宣代採為吾造船則乘此舩而可行幸當有幸福天皇乃隨神教遣命作舟此神舩遂征新羅還未之時祠祭此神於斯浦并留舩以獻又名此地曰美女賣又云敏馬浦○雜談抄云撰住吉社ノ側ニ舩玉神トテ小社有是則舩神ニテ侍レハ美女賣ノ神ヲ祭レル也然比舩魂ノ義ハ住吉社家者流ノ神秘云此舩玉ヲ尋常ニ舩中ニ崇メ奉ル所也殊ニ歲首ニハ餅餽神酒其外祭奠ヲ整テ祭之云○和漢三才圖會云舟神名媽祖娘倍謂之舟菩薩唐舩未于長崎間所祭神是也乎

幸木

幸

蔓萵盒子

幸木按ニ粥杖ノ類ナリ北國ニテ幸木ト云テ女ノ腰ヲウツク云又門松ノ根ニ之

木ヲ幸木也歩木ナト云葉孟子ハ葉ニテ金子ノ如クアミテ
門松ニ結付テ供物ヲ此内ハ備フル也幸龍モ此類カ未考案
與福和訓同
所謂祝詞也
三物連歌同俳諧 裏白連歌同

俳諧

紀事云正朔連哥俳諧各用席凡於京師連哥長是號
花下又謂宗匠每年今朝其一家中玩其事者及弟子
等聚其宗匠家各作連歌其第一句謂發句自其發句至百句是
唯詩句稱百韻然對其發句之第二句稱脇第三句作之為采而
近此三句稱三物今朝隨作之則割剛氏鐸梓而賣市中近世俳
諧亦然高声呼連歌俳諧之三物而往來街衢○雅州府志曰北
野社正月四日有裏白連歌凡連歌懷紙四枚也中古執事誤而
脫行面不記之自是為流例存行白紙又別添一枚為五枚依号

者也云俳諧
亦效之矣

御慶

新年良賤互相偶謂
是歲初之祝詞也

去年今年

雜談抄云貞德說ニ去年今年春也去年ト計モ春也今歲ト計
ハ句ニ可依師說連歌ニハ去年ト云詞ハ春也今年ハ雜也
句体ニ依ヘシ後拾遺いふはむねのちのちのち
コトヲケル小大君 尔雅曰唐虞日載商曰祀周曰年名
不同而義一也皆所以成一歲之功也○說文曰年本季作亮熟
也从禾干声今作年○尔雅曰稔也謂歲一稔○說文曰歲本星
也越歷二十八宿宣徧陰陽一年行一次而
四時功畢故夏以歲為年从步戌声云
君春 是ヲ大君
ト云鳥丸

寶慶卿ノ書玉ハルモノニ君トヨム事ハ大君ニ紛レユヘ
築地ノ内ニテハ讀ハカラス又惣別氏一也夫モ君ナラテ誰

ニ哉ト元ヨリ熟シル詞ハ
ユルスト也可心得ナリ

千代春

又千世初春氏百世万
代等古歌ニ見ルヘシ

新年

新讀古今 去來わいりやうきれり
権中納言 雪玉集

わいりやうきれり
なまむくをそりん

わいり

万葉集曰荒
珠之年又璞

荒玉兼玉未玉○仙覺抄曰アラ玉トハ改ルト云心也或云玉
ハ一口ハスニ滯ラス走ル物ナレハ疾心也万葉ニ○未玉乃

年往還春立者未都吾屋戸介
鶯者南計 右中舟家持

新き年

若キ年作例未考
ヨヒノ年俳ナリ

初雞

御筆曰元日朝雞ノ鳴ヲ云寅尅鳴
初ル鳥ヲイハハ夜分勿論也元日

ヲ雞且正云○拾物論曰雞有丹白鳥三色知時畜也皆積陽火
德之精也故陽出而雞鳴以類感也○說文曰雞鷄也能考時也
○索隱曰三跽三鳴也言夜至雞三鳴則天曉乃始為正月一日
言異歲也○和漢三才圖會曰和名加今又云久太加今又云木
綿附鳥倍云庭鳥雞家々畜之馴于庭因称庭鳥又稱家雞以別
野雞其種類多尋常雞倍呼名小国能鳴告時而丑時始鳴者稱
一番鳥寅時鳴者稱二番鳥人賞之已以前鳴者為不祥倍謂之
宵鳴○廣志云大者曰蜀和云蜀雞倍云唐九小者曰荆和云所謂其雞曰鷺楚
書名雞曰鳩七咤雞類甚多五方所產大小形色往々亦異江南
一種矮雞脚總二寸許若群雞夜鳴者謂之荒雞事見黃昏獨啼
者主有天恩謂之盜啼老雞南人以雞卵畫墨煮熟驗其黃以卜
吉凶又以雞骨占年其鳴也知時刻其棲也知陰晴古人言雞能

辟邪則靈禽也

初夢

紀事曰凡初夢者自大晦日夜至元旦曉之夢也故舊年晦日之夜禁裏貼盆

不獨充庵而已
船於白帟而賜官方及諸臣地下良賤亦以盆船布卧榻之被底
寢今晦日夜有吉夢則來歲得福云若見惡夢則翌朝元旦之付是
於流水是謂流惡夢和信斯船內益種々珍宝故稱宝船近世是
亦銀梓而兒童賣市中大呼宝船々々是又中華紙船之類乎○
文句曰夢者從須陀洹至支佛悉有夢唯佛不夢無疑也習氣故
不夢云○月令廣義曰占夢注掌其歲時觀天地之會辨陰陽之
氣以日月星辰占夢之吉凶季冬聘王夢獻吉夢于王

夫木 西行 雜抄曰此儀ハ只民間ニ云所也禁裏ハ

初曆曆開

雜抄曰此儀ハ只民間ニ云所也禁裏ハ冬十一月朔日南都幸德氏ノ某來年六月迄

考タル曆ヲ書進ス又六月朔日二十二月迄考テ奏スル由也
民間ニモ右幸德氏并加茂氏考ル所ノ新曆十一月朔日ニ進
奏スルヲ大經師所幸德十トヨリ申請テ是ヲ極行シテ世ニ
弘ム是ヲ大經師曆ト稱ス又伊勢神官ノ御師ヨリ後ニ添テ
送ル是ヲ伊勢曆ト云又豆洲三島ヨリ出ルハ三嶋曆ト云凡
曆ヲ賣ハ冬トシ初テ見或同クヲ春トス王維詩歸燕識古巢
旧人看新曆ト作リ曆ハ冬ヨリ用ユレ凡皆春ノ用ヲ弁スル
為ナレハ春勿論也○後漢律曆志曰黃帝造曆元起辛卯而顛
頭用乙卯虞用戊子夏用丙寅殷用甲寅周用丁巳秦用乙卯漢
作太初曆元以丁丑自三代而下造曆者各增創云○日本紀
推古天皇十年冬十月百濟僧觀勒來之仍貢曆本乃天文地理書陽胡史祖玉陳習曆法云

試筆試毫

吉書書初

三門口傳抄曰可行吉書事年始慶賀移後嫁
張云○紀事曰元日公武兩家及地下良賤各

試筆是謂書初公家試其業武家亦弓馬劍術鈇炮類各試之○
羅山文集云我朝年甫写字者皆稱試筆故試簡試免試類試觚
試毫或稱試春此皆然蓋叢林家作偈者之所初為予官家先儒
學士之文集未之見也宋六一居士有試筆之詩唯言試筆之好
惡也○故事要言云元日筆始二ハ王羲之カ月儀書夕用ヘシ
其文曰日往月來元正首祚大簇告辰微陽始布罄無不宣和神
奏素尋常凡倍ノ用ルハ朗詠長生殿裏春秋富不老門前日
月遲保胤わく公れくのくりに事りてふ乃密かきもあつる

彈初

倭倍鼓琴瑟之類謂之彈也是亦歲首試其業也琴音禽
和名古琴徽和名古琴音爭和名古琴象乃古止琴柱和名古琴琴操曰伏羲作琴

修身理性及其天真也琴長三尺六寸六步象三百六十五日也廣
六寸象六合四方上也文上曰池池水平也下曰濱又或云文上曰岩池下岩池水平也前廣後狹
象尊卑上曰下方象天池五弦象五行或五大弦君也寬和溫小弦
臣也清廉不乱云黃帝ハ此五弦伯雅十三弦ト入本邦二傳ル
一空穗物語ニ詳也○和琴和名夜乃倭名抄曰日本琴體似箏而
短小有六弦一種有鳴尾琴止此乃相傳云日本武尊始作双小弓
六張成音今製亦有六弦如張六弓是本朝樂器之始也○琵琶
胡族麗倍用撥琵琶本出於胡中馬上所鼓也魏文帝造之云本
朝仁明天皇御宇真敏入唐琵琶曲傳來是其始也朱雀院御宇
博雅三位同息信義信明最為堪能也○三線三五雜俎曰三絃
常合蕭而鼓之然多淫哇之詞唱優之所習耳夫子謂鄭聲淫○
和漢三才圖會按琉球固好多用之然不為樂器婦女里子等每

鼓之○鼓弓未詳其始形似三絃小不用撥以小弓絃鼓之○廣博物志曰夫樂者先王之所以飾喜也軍旅鈇鉞所以飾怒也故先王之喜怒皆得其齊焉喜則天下和之怒則暴乱者畏之先王之道禮樂可謂盛矣

吹初

字彙曰吹昌瑞

切風也又鼓吹凡吹笛簫成音者皆謂之吹云是亦試笛簫之音也○簫笙簧信云保世本白隨作笙長四寸十二簧象鳳之身

正月之音也物生故謂之笙○禮明堂云女媧氏造笙云○甬篪

茄管悲篪和名比千利岐徐景山云胡人牧馬截骨為筒用蘆貫首吹之以

驚群馬一說漢張騫所作為云○笛音橫笛和名古布江筆談云有雅

笛羌笛二種○律書樂圖云橫笛出於羌張騫首傳一曲李延年

造新声二十八曲○箏高麗笛和名古布江或說云篳篥聖德太子

高麗沙門惠慈傳授玉天王寺時因各人笙八四位

盛定古今無乃也笛ハ袂衣中將各人云○尺八ハ唐土普化和尚ノ作ナリ楊貴妃馬嵬ガ原ニテ殺ナル悲ノ声ヲ學ト云

舞初

紀事曰正月四辻家有樂始舞人樂人來集多有陵王納曾利○禮月令孟春之月命樂正習舞云○日本

紀曰天武天皇十二月春正月己丑朔丙午是日奏小墾田舞

及高麗百濟新羅三国樂於庭中同朱鳥元年正月壬寅朔己未

朝庭大舖是日御海窟殿前而倡優等賜祿今正月十七日

禁裏舞御覽清涼殿東小庭有舞樂此節舞樂未始前大隅高橋

隔年交勳鶴庖丁舞樂畢後有鶴高盛等獻群臣亦賜之云抑舞

曲濫觴ハアニソノ說アル氏蔡邕月令章句舞ハ樂之容也云

呂氏春秋陶唐氏云始陸多滯狀人氣壅閉筋骨率縮故為作舞

以宣導之トイヘリ是等皆人間ニ墮タル作業ナリ專佛世界

華實年表 卷之上 三十一

ヨリ世ニアマ子ニ十方浄土佛菩薩ノ在ス御元ニ妓樂ヲ奏ト云フナシ殊ニ都率内院ニハ常ニ万秋樂ヲ奏シテ三合ノ曉ヲミツアイ夕當来ノ導師讚嘆シ奉ル月宮ハ霓裳羽衣ノ曲ヲナシ虚空ヲ行動シ玉ヲ昔天竺ニハ大樹堅那玉笛ヲ吹玉琴ヲ彈スレハ如葉ハ起テ舞ヒ

阿難ハ声哥シ玉ヲト云以上體源抄出

松囃謡初 下字集

子○紀事云公武両家有松柏子倭信正月三日至十五日唱謡或為鼓舞祝之稱松柏子松取長久之義三日西東本願寺有能三番末寺僧徒著裝束勤之其後能大夫或勤之是謂續能云○豐臣秀吉公家譜曰天正十五年正月二日有謡初諸士皆獻賀或賜群臣宴之式

○詩人玉屑云放情曰歌悲如蛩蟬曰吟通俚信曰謡云○或說

云謡能藝ハ桓武天皇御宇ニ日吉ノ社ノ御前ニテ猿三匹寄合テ手ヲタキ舞踊リテリ則山王権現ノ御示現トナリ是ヲ字テ近江大和ニ猿樂トテ四座ヲ定メ近江ノ猿樂ハ猿ノ字ヲ用大和ノ申樂ハ日ヨミノ申ヲ書トイヘリ人皇三十四代推古天皇御宇豐聰太子國ヲ監シ天神地祇ヲ祭祀シ給テ以テ安国利民ノ政ヲシキ玉ヲ因テ六十六番ノ曲ヲ作り河勝ニ命ニテ遂ニ橘ノ内裏ノ紫宸殿ノ前ニオイトキ此業ヲナサシムヨツテ四海波穩ニ萬民康樂也太子其神樂ヲ以テ神ノ字ヲ折テ是ヲ名付テ申示云説文申亦神也大歳申ニ有トキ猿ヲ以テ是ニ配ス故後世是ヲ始トシ猿樂ト云也其後村上天皇万機ノ暇太子ノ筆スル所ノ申樂延年記ヲ見玉ハ群臣ニ告テ曰上諸神ヲ敬ヒ下万民ヲ安スル事申樂ニ過タ

琴家三草

卷一

三十七

ルハナレトテ則川勝、遠孫奉氏安ニ命シテ重テ此伎樂ヲ
学ス又紀氏アリ氏安カ女弟ムコ也故ニ二人正ニ是ヲ起ス
氏安二十九世ノ孫ヲ金春ト号ス大和山滿井ノ座是ナリ大
和四座ト云ハ結崎親世坂戸金剛山滿井金春外山室生是也猿樂ハ
唐ハ散樂ト云又百戲百戲云杜氏
通典散樂ハ階以前ハ謂之百戲
初高初賣賣買初

店卸帳閉帳書

紀事云正月四日市中諸商人亦始
其事凡裁補年中所記物價之簿冊

是帖綴而各祝之俸倍帖謂帳諸高今日綴年中買賣之簿書是
稱帖綴綴酒食互祝之云○雜談抄云帳面ニ大福ノ字ヲ題ス
其根源洛陽ノ上菩提藥師堂ヨリ始レリ縁起云木尊ハ推古
天皇六庚午聖德太子彫刻シ給ヒ大和國廣瀨郡宮田郷ニ伽藍ヲ

建テ藥師ヲソテ木尊トシ造營事終テ大工鍛冶諸商人ニ金
銀ヲ給フ各富貴ノ身トナル奈良北京難波堰ノ葦此縁ニア
ヤカラント此堂ニ來集テ帳ノ上書ヲ大福帳ト題スル事大
福寺ヨリノ義ニヨレリト云文龜ノ頃此寺今京ニ移リ今絶

歳旦開

正月撰吉辰連歌誹諧各用席此事アリ歳旦トハ
歳首ニ賀詞ヲ発句ニ作りタルヲ云今世ハ冬ノ

内ニ門第ノ句ヲ乞集テ繕梓是ヲ一帖トシテ歳旦帖ト云
此一帖ヲ門中へ送ルナリ其事ヲ始ル日ヲ歳旦用ト云○今
式云歳旦ハ手際モノニテ佳句稀也尤禁誡ノ詞手亦於葉送
假名ニモ心ヲ付ヘシ假令ハ高砂ノサシヅモリクテ光ノ鶴
ノト云事アリ觀世厄近ハツモリクテト切テ訊ヒシ也云續
クレハ手負ノ鶴トキコフル故也此類イカホモ有ヘシト云

節振舞 朝節 夕節 節小袖

紀事云京師信自元日至晦日親戚

朋友互設酒食饗忘謂之節節者節句ノ下略ニヤ節小袖モ

准之知ヘシ朝夕ハ饗忘ノ時刻ヲ云○荆楚歲時記曰元日至

於月晦並為脯聚飲食士女泛舟或臨水宴樂按每月皆有弦望

晦朔又正月初年時倍重以為節也弦三日望十月晦朔晦日朔日為節トハ佳節ト

定レ意ナリ和信正月親戚ヲ饗スルヲ節ト云ハ據之乎○法

苑珠林曰唐長安風俗每至元日已後適飲酒相邀迎踴傳生酒
松内注連内春分正月十五日迄ヲ松ノ内注連ノ内ト云十五日ノ朝明戸ノ

飾リヲ元義長ニ爆ラス也江戸ニハ七日迄ニテ門戸ノ飾ヲ
除ク近來ノ風俗ナリ黒田家ハ古來ノ如ク十五日迄飾アリ

春ナガトハ是モ祝詞ナリ
初春ニ三春ノ季長キヲ云 初芝居
紀事云正月二日四條河原淨瑠璃歌舞妓等

始之是稱初芝居武江堀町大坂道頓堀等亦然凡年中節句後
宴神事後日其方士農工商并人家奴僕以此日為休暇遨遊任

意此等多聚見此芝居芝居者古無襪布四垣亦立之唯坐芝上
而各見之依稱芝居和信謂原野曰芝棧布元假皮也今誤稱棧

數○雍州府志曰歌舞妓元出雲大社巫女有踰久尔者一轉神
樂歌舞古稱白拍子之類相比乎元録年中有名護屋三九衛門

者元武人而落魄生也在京師則与彼女密通共謀之作歌舞妓
之曲又稱猿若者三九衛門所每赴之娼家奴隸男有猿若者形負

如猿猴性魯鈍不通人情三九衛門常玩之今世稱狂言猿若者
始之遂祇園社南門用場催之是歌舞妓之始也自茲遊女長仇

渡嶋其使遊女狹者教歌舞施藝能良賤集誠託人心乱国滅家
之基岳過之依之禁女藝寬文中又始考衆歌舞妓一說芝居
号南都與福寺南門前
二月薪能出於草居也
千壽万歳
尾兩村千壽万歳兩座
紀事曰大和国窪田著

大夫来所司庭為鼓舞凡千壽万歳出自窪田箸尾兩村在南都
西南相去三里許此內有兩流則窪田箸尾是也窪田大夫箸尾
大夫准九部右部而稱之云千壽万歳正月五日禁裏木造始此
日千壽万歳并猿舞東御庭来是季吟が千壽ハ猿廻又千
壽万歳ハ万歳樂テ踏歌ノ節会ノ学トイヘル也凡京師舞猿
者有六人倭倭狙公謂猿麻波志此外妄不能使猿又伏見有六
人○千梅篋纏輪猿曳常ニ有ハ禁庭ニ参
リテ舞心ナクハ無季ト云ハ誤リ前猿曳ノ
歲ニテ千壽

ヲ略シテ云ニヤ○岷江入楚曰昔正月十四十五日京中遊士
月ニ乗ノアヲ夕コナ夕歌ヒ舞シヨリ宋代ニ千秋万歳ト云
テ逸典ヲ催ス事アルハ是少余凡也云千壽万歳大和ノ外モ
有ケルニヤ○河湯殿記云元龜三年正月五日北畠のサレ
まんふ三人系北畠者指南抄一糸より心そのる三所云ふ
然ハ都ノ内ニモ有ケルニヤ今万歳ト称スルハ鳥帽子素袍
ヲ著シ鼓ヲ打早歌ヲ唱フモノ也又三河国ニ一汎アリ或説
大江定基博學大才ニシテ佛道ニモウトカラ又人ニテ正月ノ
祝モ目出度事ハフリタリトテ我知行所ノ百姓ニ教へ佛法
東漸ノ歌ヲウタハセ春ノ始ヨリ世事ヲ忘ル媒トセリ今
ノ世ニヒロリ
三河万歳是也云
御降
雜於抄云世倍歳始ニ降雨雪ヲ
オサガリト云按ニアニサガル

轉語也云一說元日ニ降雨ヲ云○今式云元例月三日、ウキ
降雨ヲ吉瑞トス禪才凡月集出云十月朔日るゆり、
かさりいん小春の候と初日 西月
き乃へ子の呼ぶ氣の多き日 貞徳
是十月朔日ヲ小春ノ元日

ト取合夕 寢積寢舉 寢与縮和訓相同故為祝詞子積奉
ル句作也 亦縮之縁語也○雜談抄云寢卧ト

尋常ノ如ク唱ルハ病床ナトニ紛レケ 水祝 紀事曰有要
レハ斯云也涙ヲ流ラ米コボスト云同 新婦者則朋

友聚其家入水於桶大灌其人是殺除之謂也○日本紀孝徳帝
紀粗有其儀而後其人設酒食用浴室而謝之是謂水懸振舞和

信灌水曰加俣留饗志曰振舞又信新婦言新造言新造宅使居
之義也云一說永録之頃阿波ノ三好が家土松永久秀が姪女

コ竈臣ニ厭ニヨリ此戯レ初ル是皆儀ニ掲色ヲ用ル事黒ハ
水ヲ主トス故ニ水ヲ添ノ謂ト附合ノ説ヲ設レニ起ルト云

懸想文賣 紀事曰清水強指著赤布衣以白布覆頭面總
露兩眼而賣紙符於市中是謂懸想文云其未

由不詳唯祈嫁聚 桃符 桃板 桃梗 仙木 神茶
故謂懸想文云

樹討壘 淮南子曰羿死於桃楸詩慎注云楸大杖以桃為之
斃手殺羿由是以未鬼畏桃今人以桃梗作杖歲且植

於門以辟鬼由此故也○六帖曰元日造桃符著戶謂之仙木百
鬼所畏○凡信通曰東海度朔山有桃樹屈盤三千里其卑枝向

東北曰鬼門有二神曰神荼鬱壘衆鬼出入執
以飼虎於是黃帝法而象之立桃板於門戶上 畫雞帖戶

畫雞帖戶

葦索 荆楚歲時記曰正月朔日帖畫雞戶上懸葦索於其上

中爆竹畫雞貼之鏤五色土戶上以壓不祥

如願 歲時記曰有商人過清湖見清

湖君君向所須有人教云但乞

如願君許之果得一婢如願即其名也商有所求悉能致之後因

正且如願晚起商人趨之走入糞壤中不見今人正且以細繩繫

偶人投糞掃中云令如願○五雜俎云因中倍不除糞土至初五

日輦至野地取石而返云得室則古人喚如願之意也云

段灰飛 歲時記云立春日取竹為管取段為灰以段葶灰實

律之端曆者候氣至則灰飛而管通以應六律云

春盤生菜 齊人月令曰立春日食生菜取迎新之意云

立春日以春餅生菜相饋送号春盤○本草

時珍曰五辛菜乃元旦立春以葱蒜蓼蒿芥辛嫩之

菜雜和食之取迎新之義○杜甫詩春盤細生菜

綵燕 荆楚歲時記曰立春日悉翦綵為燕戴之帖宜春

戴春燕字于門○王沂公春帖子云綵燕迎春入髮○

歲時記曰立春日貴戚之家翦綵為小幡謂之春幡

或懸佳人之頭或綴花枝之下又翦為春蝶云

初子日 子日乃好い小松川子日の松初子日の玉夢

扶桑略記曰宇多天皇寬平八年閏正月六日有子日宴行幸北

野雲林院○管家文章曰扈從雲林院不勝感歎聊叙所觀序云

予亦嘗聞于故老曰上陽子日遊厭老又曰倚松根以摩腰習凡

霜之難犯也和菜羹而啜口期氣味之克調○拾芥抄曰正月子

令者也。凡鞍馬山中不羸，難言難好，食螟蛇之故也。○元亨秋書曰：當山者，大中大夫伊勢人之所創也。大夫歸仙，尤篤。常曰：安得勝地，建道場，安觀音像。延曆福之間，夢往城北之山，有翁鬚髮皓々，告曰：此地甲天下，山似三柱，常出五色雲。汝當練若，利益無量。大夫夢中問曰：誰？子翁曰：王城鎮守，貴船明神也。覺而未知何處。大夫有白馬，常所騎也。裝鞍語曰：昔摩騰法蘭載舍利像，經白馬，未震且然者，白馬者靈畜也。汝定知我夢地，乃放馬，從一童子，其馬向城北而去。至一山河，駐茅草中，童還告此事。大夫往，見其地，宛如夢中。通於茅裏，得毘沙門天像，刻一字，安像。故号鞍馬寺。大夫以為我欲安觀音像，今只置天像，願未果。予其夜夢童子，年十五許，告曰：當知觀音多門，名異體同。夢覺後，解疑云：緣起一八。南都招提寺僧鑑禊鑑真，室龜元年光仁正月四日，初寅日感得。

故今世正月初寅日，ヲ會式トシテ天下
畚卸 紀事云：初寅
 豐饒ノ修正ヲナシ万民參詣ストナリ
 詣或又用第

二日，此日鞍馬近處往還路辺之西山岸高，構小菴，自其内著繩下，蕘於路辺。參詣男女有欲求燧石者，則納錢於蕘，則以所著之繩，投上之底，其錢之多少，而入燧石，而再下之。是謂蕘下，操其蕘者，鞍馬地出生之地下人，而剃鬚髮者，交勤之世，称鞍馬坊主，和倍劬法中之例，呼剃髮人專。
初卯 正月初卯日，詣提別住吉神社，是謂初卯詣。今日於社中，授神符於參詣之諸人，是謂卯札。○旧事紀曰：底筒男命，中筒男命，表筒男命，此三神者，津守連等齋祠云。○日本紀柳卷曰：表筒男，中筒男，底筒男，三神誨之曰：吾和魂，宣居大津津中倉之長峽，便因看往來，舩於是，隨神教，以鎮座焉。按表津少童，中津少

童底津少童從祀神功皇后欽○新日本紀曰先師說稱四座者
 神功皇后坐別殿欽○撰凡土記曰稱住吉者昔氣長足比賣天
 皇世住吉大神現出而巡行天下竟可任國時到沼名掠之長岡
 之前前者今神宮南邊是此地乃謂斯實可住之國遂讓祚之云真住吉國乃是定
 神社云此神四月卯日ツツエ出現也仍用卯日乎
 杖ツツエ江次第曰上古有出御南殿皇
 太子參上儀近代不行春宮被
 獻卯杖其木榎榭三束木瓜三束比々良木三束牟保已三束黑
 木三束桃木三束梅木三束椿三束云○公事根源曰卯杖は
 持統天皇三年正月の卯日大學寮より是を奉り申日本紀は
 又仁壽二年正月小治清府後杖と稱して榎魁と云ふこと云々
 是より榎魁と稱ふらざり傳物所より是を以て造物ありと
 其上に雲やれ中少御士氣乃方の歌と云らるる卯杖ありと

○浮舟卷卯杖注卯榭卯杖曰一事に云中れ魁魁と述
 之先院殿沙流し又ち在卯杖中をの坂なり一事ありをを乃
 坂らふ類は卯杖行きたる其同と云る事あり

卯杖はくをを乃の坂と云ふは坂と云ふは貫之

漢宮儀云正月卯日以桃枝作剛卯杖壓鬼○漢書王莽傳云正
 月剛卯金刃之利注服虔曰剛卯以正月卯日作佩之長三寸廣
 一寸四方或用玉或用金或用桃者草帶佩之○雜詠抄云今
 ノ世ニ加茂ヨリ卯杖トテ在家ナトニオクルハ一尺余ノ白
 削タル木ニ日蔭カワラヲ纏テ便
 利伽羅童ノ形ニ作レル物ト云
 二宮大饗ダシキヤウ日本紀曰
 天武天皇
 朱鳥元年春正月壬寅朔戊午宴後宮○日本後紀曰淳和天皇
 天長七年正月群臣拜皇后賜被又賀皇太子云○公事根源曰

さし酒まゝ公務にせしめ給ひ修飾宮にゆゑるも大方大臣は母后乃
 大饗六年三月の御儀に於ては、
 中右記裏書臨時客者尊客引諸卿列立南庭殿上人家主降立御
 前二拜了主客座定荷徳大臣被參殿上人着庇坐先居尊者饌陪膳
 位供五位三人料敷高杯三本次居主人饌次一献四位主人勸盃
 殿上人座勸盃五位次二献藏人頭殿上人座五位居尊者飯汁高
 器海雲汁假次居納言以下飯汁一折次居殿上人汁次三献公卿
 勸盃參議次殿上人坐位次汁物雜次催馬樂朗詠或肩脫次
 四献公卿勸盃中納言次殿上人座四位次菓子次五献公卿勸盃
 中納言次殿上人座四位次薯蕷粥次引出物云公事根源年中行支
 其趣同

多々やく

江次第曰菰三日三献供畢次典藥寮供御膏菜
 次供御匙盛千瘡膏於金銅小器居中盤供之付

於藥女官女官付頭頭傳陪膳陪膳供之主上取之以右手無名
 指令塗於九掌給注云曲右第四指是藥師印相也○後醍醐
 抄傳御額并耳裏云御夕ウヤノ御膏藥ト書カウ藥ノ
 名ヲ忌テ夕ウ藥ト号也千瘡膏一名千瘡万病膏

履新

之慶

履端之慶同意○九傳曰先王之正時也履端子始舉
 正於中歸餘於終云○唐礼樂志曰皇帝受群臣朝賀

曰元正首祚景福維新惟陛下與天同體臣等謹上千秋万歳制
 答曰履新之慶與卿等同之云履端ハ端ヲフム也ラウ玉リ行
 年ノ端ヲフマヘテ賀スル心也フマヘルハ領スル心次履新
 モ同シ意ニテ改年ノ御慶ナトイフト同シト季吟モイヘリ

叙位

日本紀曰推古天皇十一年冬十二月戊辰朔壬申皇
 太子聰請于天皇始行冠位大德論小德大仁位小仁

大禮位六小禮大信位七小信大義位八小義大智位初小智并十二階云
 同十二年春正月戊戌朔始賜冠位於諸臣各有差成敗○江家
 次第曰叙位諸卿著九仗次著議所○公事根源曰天智天皇
 十四年正月諸王諸臣小爵位了治の元くり世叙位り
 六日しゆりて天徳の元くり世叙位り世叙位り
 芳以参して位了治の元くり世叙位り世叙位り
 正月六日叙位儀依昨日主上御表日延引今日於攝政直廬被
 行之云執柄家ノ表日モ亦除レ六日ニ被行常ノ事云○職原
 抄曰叙位叙其位言昇進○周礼内事置其叙注今次也疏介副
 也又司市注謂行列也○字彙曰叙从文信从又○叙位式畧之
 紀事云正月二日愛宕寺牛玉加持在清水坂西今
 天狗宴イカモリ
 日入夜強指聚客廳南北二行座各宴飲其在座上

之人持信木而起舞是謂天狗酒盛元轉供酒盛也其體麻豪也
 故借其音或謂天狗酒盛宴終後各登堂以牛玉杖大敲門扉或
 床壁又吹法螺擊太鼓其間寺僧貼牛玉是皆攘惡鬼之謂也○
 名勝志云以呂波字類抄イカモリ瑠イカモリ皇寺イカモリ愛宕寺イカモリ參議小野篁卿建立用基
 慶俊僧都云○寶物集云珍皇寺北アルハ八坂塔ト云リ住音
 大寺ナルニヤ○雜談抄云天狗酒盛ハ東西ニ坐ヲ設テ互ニ
 脊ノ高キ人ヲ出メ勝負ヲ
 争フ事云事繁クハ畧之
 人日靈辰七日正月潜確
 類書曰正月元七厥日惟人云○東方朔占書曰歲後八日一日
 為雞二日為狗三日為豕四日為羊五日為牛六日為馬七日為
 人八日為穀云○靈辰者唐李嶠人日詩七日最靈辰注以人為
 萬物之靈故謂人日○周書恭誓上曰惟天地万物父母惟人萬

物靈云○七日正月者倭倍正月七日ヲ五節句ノ為初七種羹
ヲ食フテ遊宴シテ嘉儀ヲナス是ヲ謂七日正月下賤ノ輩正
月七日七日等ノ日ヲ正月ト号スイフ心ハ恣^{ホラシ}遊^{ホラシ}遊^{ホラシ}スルヲ云
幾内ノ土民耕作ノ豊凶一隨ヒ産沙神ヲ祭リ民家ノ業ヲ止
テ休息スルモ亦二日正月
三日正月ト云准ヘテ可知 人ヲ貼帳^ニ 荆楚歲時記曰人日
亦戴之頭髮又或相遺取新年改舊以新之意 初若菜
賈元典戒曰人日造華勝相遺象瑞山金勝之形

若菜七草齋

荆楚歲時記曰正月七日倍以七種菜
作羹食之人無万病云○世談問答曰
正月小陽の月なり又七日小陽乃枝なりと云朝庭と云
私の家ももはるゝ寓を以て作つものや食すれば万病又邪

氣と云く粥かきと云○公事根源曰内務寮かき小内膳司
より正月上れ子日乞取も也寛政年中より始まる汁と云延
喜十一年正月七日に後院より七種の若菜と倍と又天曆曰多二
月廿九日女清安子初は若菜と倍と云李部王礼記云云
○紀事曰今日良賤互相賀自昨日至今朝家々載湯燗無苦菘
等於砧儿而以杖敲之代七種菜而用之今日敲之謂拍七草今
朝以是謂菜粥各食之倍同以燗七草之湯漬瓜剪之云○和漢
三才圖會曰粥饘^{加木}粥^{之留}粥^{之留}配^{倍云於}本綱曰煮采為糜使糜爛也粥
濁於糜香々然漢書注云黃帝始烹穀為粥其厚曰饘薄曰配毛
氏曰粥字以兮象氣之形与弓字不同今皆作弓矣○張耒粥記
曰每朝起食粥一大椀空腹胃虛穀氣便於所補不細又極柔臆
與腸胃相得蓋粥能暢胃氣生津液也云○陶書風俗志云宋人

採聚七樣之菜果為羹。○雜談抄云公事根源寺ノ諸抄七日ハ七種ノ若菜トアリ十五日ニ七種ノ粥ヲ献スル由之資隆卿ハ條院へ書進スル簾中抄又同或云七種ハ七日ノ粥ノ事ニテ侍ル七種ノ粥ハ十五日ノ故實也則七寶羹ノ義ナルヘシ菜果ノ菓ノ義十五日ニ有ヨシ見夕リト云○太宗家訓曰七種ノ若菜ヲ調テ代神并所ノ三寶次ニ父母ニ献ノ後ニ食スレハ春ノ氣病甚ノ疫病秋ノ痢病冬ノ黃病モヤニス又人ニ七魂ト云ハ天ニ七曜ト現シ地ニハ七草トナリ是ヲ取テ食スレハ我魂ノ氣カヲ増命ヲ延云○世說故事死云歩七種菜事諸子ノ考未見梅事文類聚ニ歲時記ヲ引曰正月七日多鬼車鳥渡家々槌門歩戸滅燈燭禳之以倭倍七種ヲ打唱ニ唐土鳥日本鳥度ヲ又先ニト云ハ此鬼車鳥ヲ忌意ナリ

板ヲ打鳴スハ鬼車鳥不止ヤウニ禳也事文引大平廣記云鶴鷓即鷓也一名姑獲一名夜遊女又名鬼車春夏之交稍遇陰晦則毛鳴而過嶺外尤多人人家錄人魂氣或云常滴血滴血家則有凶咎云○紀事云以今朝之菜粥謂福涌四日亦謂福涌亦煮若水謂福涌何不知其正也○齋本州時珍曰齋生濟々故謂之齋秋家取其莖作挑燈杖可辟蚊蚋謂之護生草云能護眾生也有大小數種小齋葉花莖扁味美大齋科葉皆大味不及並以冬至後生苗二三月起莖五六寸間細白花詩曰誰謂荼苦其年如齋是也和名ナワナト云秋冬ヨリ春アリテ甚ナシ故其ナキノ下略也○齋本州時珍曰此草莖蔓甚繁中有一縷故名倍呼鷓兒腸菜象形也易於滋長故曰滋草古樂府云為樂當及時何能待來滋滋乃草名即是也正月生苗葉大指頭細莖引蔓

斷之中空也有一縷如絲作蔬其脆也三月以後漸老用細辨白
 花結小實云倭名三草古歌アリ○芥本州時珍曰芥當作勤
 从中勤諧声也後省作芥云○呂氏春秋曰菜之美者有雲夢之
 芥雲夢楚地有勤別勤懸○示雅翼云地多產芥故字从斤芥有
 二種水芥生江湖陂澤之涯旱芥生平地二月生苗其葉對節而
 生其莖有節稜而中空五月開細白花云詩云霽沸檻泉言采其
 芥云此草冬月アリ倭倍嚴寒ノ間尤賞翫ス和名セリ其姓一
 所ニセニリ合也セニリノ中畧也異名根白草又ツミマ草
 又正少氏云○菘本草時珍曰按陸佃埤雅云菘性凌冬晚凋四
 時常見有松之操故曰菘今倍謂之白菜有二種一種莖山厚微
 青一種莖扁薄而白其葉皆淡青白色八月以後種之二月開黃
 花云是蔓菁之類倭倍稱之曰菜在水田稱水菜又浮菜在圃稱

菘菜於諸國稱京菜又在冰田曰菘生圃曰菁云今スハナトハ
 小菜ニテ少キ心氏云○鼠麴草本草佛耳草和名母子草出文德
 實錄曰田野有云倍名母子草二月始生莖葉白脆云○蘿蔔韓
 保昇蜀本草云菜服倍名蘿蔔按尔雅云突蘆肥孫炎注曰紫花
 菘也倍呼濕菘似蕪菁大根倍名雹突本草時珍曰王禛農書曰
 北人蘿蔔一種四名春日破地錐夏曰夏生秋曰蘿蔔冬曰土酥
 謂其潔白如酥也珍按菘乃菜名因耐冬如松柏菜服乃根名云
 是和ニ大根ト稱スル物七種ニハス、シロト云ス、ノ詞スハ
 菜同意小ハナリシロトハ根ノ白キヲ云須和名ニ濕菘ヲ古
 保祢ト訓ス是大小根ナリス、ノ詞ニ叶ヘルニヤ○佛座本
 州時珍曰黃瓜菜其花黃其氣如瓜故名二月生苗田野偏有小
 科如薺三四五月開黃花花与莖葉並同地下但差小耳云臭蒿

一名土器菜又名田平子是尋常ノ七種ノ
若菜ト云又公事根源ハ十二種アリ畧ス
尊菜摘 万葉集惠

貝ト書リ○為君山田之澤尔惠具採跡雪消之水尔裳裾所沾

藻塩草芥の及名からして、いふと、かゝるのまゝに、いふと、かゝるも

又云女萎とわきて、名ごころをり、日幸花すも、いふと、かゝるに、わ

後頼仲実のまゝ、いふと、かゝる、いふと、かゝる、いふと、かゝる

も、いふと、かゝる、いふと、かゝる、いふと、かゝる、いふと、かゝる

○此方と并れ、池に、いふと、かゝる、頭胎云、名ごころ、女萎と書て、名ごころ

名りくと、こゝに、いふと、かゝる、或は、芥と、いふと、かゝる、六帖、芥、芥、芥、芥

名く、いふと、かゝる、○本草集解、蕪菘、曰女萎、似白欽、蔓生花、白子

細荆襄之間、名為女萎、亦
芥蒿摘 磯菜摘 藻塩草、かゝる

これ、いふと、かゝる、又、いふと、かゝる、わ、芥、芥、芥、芥、芥、芥、芥、芥

いふと、かゝる、いふと、かゝる、いふと、かゝる、いふと、かゝる、いふと、かゝる

名我蒿和各於八木、崔禹食經云、狀似芥草、而香、作羹、食之、○詩

小雅、曰、菁々者、我陸機注、即我蒿也、○本州、時珍、曰、蘆蒿、一名我

蒿、似小薊、宿根生、先於百草、万葉集 春日野、介烟、立所見、城、城、城、城

四、春野之、菟芽子、採而煮、良思毛、○磯菜、八重垣、云、磯菜、いふと、かゝる

若菜の、む、いふと、かゝる、新、いふと、かゝる、いふと、かゝる、いふと、かゝる

し、女子、俊成、若菜、十二種、ノ、内、水、雲、
白馬節會 續日本紀、曰

アリ、海藻ノ、類、モ、磯菜、ナラ、ン、カ、
光仁、天、皇、宝

龜、六、年、卯、春、正、月、七、日、天、皇、御、揚、梅、院、安、殿、設、宴、於、五、位、以、上、既

而、内、廐、宴、進、青、御、馬、兵、部、省、進、五、位、以、上、裝、馬、
○文、德、實、錄、曰

五十二

仁壽二年正月甲戌幸豐樂院以覽青馬助陽氣也賜宴群臣○
 江次第曰九右大將下殿立巽角壇上馬允奏奏文史生持硯大
 將先取之奏覽之允取硯候大將加署後取文侍從押杖鳥口
 參上付内侍退著本坐件奏留御馬本必二十一匹也每年九
 右寮各十疋進之其殘一馬稱之餘馬隔年兩寮互進之裏書曰禮記
足然而用二十一疋者三七之義也
三陽之義七日義之由見寬平御記次白馬七疋次左右允次白馬七疋次左
 右屬次白馬七疋次左右助次右白馬陣渡畢次白馬經殿上前
 無名門明義仙華門度御前自瀧口此門御殿
皇清筆雖御物忌猶度次分
 參三宮東宮齋院等次供御膳臣下應之三獻
儀式等元且同三獻内教坊別當奏舞
 妓奏内侍奏之件奏留別當儀坐樂人等於射場殿發音樂舞五
 曲云○世談回答曰十節記曰白ると馬の性ハ中ノ疾天ノ白龍
 わり地ノ白ると又天の用ハ龍なり地乃用ハ馬と云ハ之わり又礼

記曰春ノ東郊小むらさきも七疋よりわらさきり又まはハまの
 色さいり、白きとのハまらちて見あるもこれハまらさきハハ
 ○公事根源曰三月七日にもろくはれん年中ハ好氣とのをくろふ
 中ノのりに明の淨門和元年五月豐樂院よりしりもろく
 以んるや云凡元日七日十六日
 是謂三節会然以七日為大節也
菜摘川神事 神社啓蒙
云勝手神
 社在大和国吉野郡吉野川所祭神一座受鬘命其祖
未考六十四神
 式云天孫降臨之時三十二神相逐而奉天降也次為護国後見
 被下之此二神云受鬘命勝手大明神也云即此神之祭祠也每
 年正月七日此社ノ神人氏ノ男女此川辺ニ至リ若菜ヲ摘勝
 手御前ノ神供ニ備祭祀ヲナス故菜摘川ト云○今式云此神
 供ニ用心器ヲ吉野鉢ト云云○吉野山吉水院云勝手明神ニ

大宮本地毘沙門天神若宮本地文殊赤右社頭ハ役行者建立
 出現ハ人皇六代孝安天皇六年甲子ト旧記ニ載之又神功后
 宮御建立ノ説アリ正月廿三日神事能有之三月十一日九月
 十九日而度祭礼アリテ神輿本堂へ渡御其外修正会ハ講等
 有之トイヘ凡今菜摘川神事ト云フ不分明菜摘川ハ吉野ヨ
 リ行程一里余菜摘村ニアリ此河氏神ヲ花籠明神ト云小社
 ナリ何ノ神ト云フヲ不知南朝ノ頃ハ六月被行玉フト
 イヘ凡今其形モ絶尤菜摘川吉野山ニ属セヌ勝手祭不審云
箕面富 紀事云正月七日今夜諸人競来堂上突富音其法
 天女前置大櫃三箇称第一第二第三也其蓋上同
 小穴今夕寺僧積置数千枚木札參詣人使寺僧記已名於札上
 而自穴入櫃内或入一札及三札共入三箇櫃各納了大運轉而

後寺僧以長錐自穴突之数千枚中札無已名者不取之然則得
 富如札之次第云○摂州豊嶋郡箕面山瀧安寺縁起云當山役
 小角ノ兩基白雉元年ノ草創也小角或時金剛山ニ住シ化他
 ノ悲願ニ身ヲ抛テ密教求法ニ志ヲ励ム或時乾ノ方ニ當テ
 一ノ異光有行者希有ノ思ヲナシテ心中ニ誓フク若我所求
 ノ靈地アラハ其地ニ浴留ルヘシト一ノ三鈷ヲ投玉フ此鈷
 雲ニ乘ノ當山瀧並ノ松ニカレリ行者此地ヲ尋来レハ老
 翁忽然ト現シテ告テ曰此瀧屈ニ入ラハ求法心ニ叶ヘシト
 テ去又教ニ任テ龍宮城ニ入龍樹井ニ謁シ深秘ノ大法兩部
 皆会悉ク授玉フ今来レル瀧地是我淨土也辨才天擁護シ給
 彼瀧ノ辺ニ天女ノ像ヲ安置シ奉ハ扶桑ノ佛法退轉アラシ
 ト云仍テ尊天ヲ彫刻伽藍建立ノ地ナリ今所々富效之ニマ

御齋會

公事根源曰云大極殿云々八日より十四日まで七日
の万歳勝王經を講じし朝家を行つた云々此

經より分心齋法は功徳わたりて荒玉の法は
之講を講じし云々○江次第日本紀曰天武天皇九年始説金
光明經于宮中云儀式具略云講讀師參上衆生座定推来着
座唐樂卿東拍樂卿西法用呗散花梵音錫杖説法論義分講讀
師退有執蓋執綱等云○拾芥抄曰大極殿御齋會神護景雲四
年戊午始之有行幸與福寺維摩會某師寺寂勝會已上三會以
法相宗為講師○元亨釈書曰釈道慈天平九年冬十月始寂勝
會於宮中云同曰釈源泉播州人也長久四年為寂勝講師至四
天王品四王現形唯帝獨見餘不見尔来寂勝講場設四天座教
為永式天喜元年為延曆寺座主然則講師不限法相乎此經一

切經中寂為第一故題云寂勝王是以朝廷建御齋會講論此經
護持国家乃至諸州住々講説此經以為勝業所謂某師寺寂勝

真言院御修法

病直人

自正月八日至十
四月被行之後七

也云
日之御修法是也○續日本紀曰美和元年釈空海奏狀云伏乞
自今以後一依經法講經七日之時將擇解法僧二七人沙弥二
七人別莊嚴一室陣列講尊像莫布供身持誦真言然則頭密二
趣契如来之本意現當福聚獲諸尊之悲願云初依請修之永為
恒例○帝王編年記曰美和元甲寅始置真言院於宮中為鎮護
国家五穀豐饒每年限一七日被修法云○拾芥抄曰真言院在
八省北云○公事根源曰云々令別安んべの年昭亮安んべに
寫し修せし云々○病直人者漢語抄云晝勤曰直夜務曰病合

